松屋外集

十七

835
26
4

帝國圖書館藏

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4

ガラス使用

835-4

松屋外集巻之十七

目録

第一 同居
義居 忍 百忍
第二 をふしまじ里ふ生(オヒ)しける
小枝(サエダ)
第三 霜を主
霜くづを 霜柱
第四草のかき葉
第五鹿のとこ ゑ 霜のたゞち

大正
10.2.24
購求

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

常影（トカゲ）　とがゝ

第六さら〳〵ゝ

さらと云詞四種

第七さねきの花

さなぎ

第八もゝとりあへば

舟の湯　　屓（エトリ）

第九なにの湯

湯坐（ユエ）　湯部（ユベ）

第十ゝめ〳〵

笑靨花（コバメバナ）

第十一大刀契（タチケイ）

たいとけいの訓

第十二番守所（ルスショ）

第十三和與

和與物　　和與狀

第十四税所（セイショ）

魚符（ギョフ）

さいーよをせいーよと訓（ヨム）ハ誤

第十五雩（ウ）

祈雨（アマゴイ）

あまびき、

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4

ガラス使用

第十六朽木形几帳
第十七海部の文
海浦
海賦
第十八分の字
一銭　一銭目
第十九帛
帛衣の類
白無垢

子戸部復奏前登州義門王仲昭六世同居其旌表ニ有リ聽事歩欄前列ニ屏樹烏頭ヲ正門閎閎一丈二尺烏頭二柱端冒ニ以テ瓦桶ヲ築キ雙闕一丈在リ七尺ニ夾ミ樹槐柳ヲ十有五歩請フ如シ之ヲ勅曰ク此故事也今式無シ之其量地之宜キヲ云々又六十二丁左 南唐世家ヨリ州縣言フ民孝悌スル五代同居スル七家皆ナ表ス門閭ニ其ノ繇役ヲ其ノ尤盛者江州陳氏宗族七百口毎食設ケ廣席ヲ長幼以テ次ヲ坐メ而共ニ食フ有リ畜犬百餘共ニ一窄ニ食フ一犬不レ至ラ諸犬爲ルヲ之カ不食云々吳曾ノ能改齋漫録四卷辨誤五世九世同居の条ニ王彦輔ガ麈史載スル張全翁朝議爲ニ子言滁州有リ一農夫五世同居太宗討テ并州ヲ過ク其舍ヲ召テ詢フ之ヲ曰ク若何道而至レル此其長對テ曰ク臣無他惟能忍耳此レ與唐張公藝事同按唐張公藝九世同居高宗有リ事太山臨幸シ其居問フニ其本末ヲ書メ忍字百餘以テ對フ天子爲ニ流涕スト云々羅太經ガ鶴林玉露十人集五卷丁右 陸氏義門の条ヨリ陸象山家ニ于撫州全谿累世義居スル一人最モ長タル者ヲ爲ス家長ト一家之事聽ク命ヲ焉逐テ年選テ差フ子弟ヲ分チ任ス家事ヲ或ハ主リ田疇ヲ或ハ主リ租稅ヲ或ハ主リ出納ヲ或ハ主リ廚爨ヲ或ハ主リ賓客ヲ公堂之田僅ニ足リ給ス一歳之食ヲ家人計口テ打レ飯ヲ自辨ス蔬肉ヲ不レ合レ食ニ私房婢僕各自供給ス許ス以テ米ヲ附テ炊ヲ毎ニ清

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

曉附炊之米交至掌厨爨者置歷交收飯熟按曆給
散賓至則掌賓者先見之然後白家長出見款以五
酌但隨堂飯食夜則卮酒盃羹雖久留不厭每晨興
家長率衆子弟致恭于祖禰祠堂聚揖于廳婦女道
萬福于堂暮安置亦如之子弟有過家長會衆子弟
責而訓之不改則撻之終不改度不可容則告于官
屏之遠方晨揖擊鼓三疊子弟一人唱云聽聽聽聽
聽聽勞我以生天理定若還懶惰必飢寒莫到飢
寒方怨命虛空自有神明聽又唱云聽聽聽聽聽聽
聽衣食生身天付定酒肉貪多折壽人經營太甚違
天命定定定定定定又唱云聽聽聽聽聽聽聽聽好
將孝弟酬身命更將勤儉答天心莫把妄思損眞性
定定定定定定早猛省食後會茶擊磬三聲子弟
一人唱云凡聞聲須有省照自心察前境若方馳騖
速回光悟得昨非由一頃昔人五觀一時領乃校山
之詞也近年朝廷始旌表其門閭其詞曰張公忍字
睦九世於唐朝陳氏義居專一門於江左若譬前美
兄謂鮮能撫州青田陸氏代有名儒德在謚典聚其
族逾三千指合而爨將二百年異時流別籍之私存
學者齋家之道詢于州里既云十世可知登之簡書

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4
ガラス使用

奚止一鄉稱善視昔爲盛於今爲難部使轉以上聞儀曹請爲褒別事關風敎須議指揮云々謝肇淛五雜俎十四卷卅事部ヨ張公藝九世同居古今以爲口實近代浦江鄭氏尹蓋由祖宗立法謹嚴子孫世世相承不敢踰越縱有長舌之婦敗羣之子無所容其惡也然吾以爲人心不同一室之內豈無胡越況於孱婚悍婦驕兒稗子代不乏人間隙一開仇讐漸起與其隱忍包涵中離外合不如分析各得其願使兄弟好合妯娌肅雍無害於義政不必慕古人之虛名而釀鬩牆之實禍也余嘗見巨室兄弟衆多先後死若日逐勃谿至於婢使奴隸各其主怨尤讒隙無所不至始不能一日安其生者此雖女子小人之性亦宜分而強合有以致然也故必世世人人不畏婦而後可以同居如浦江者絕無而僅有者也○張公藝書忍字以進其意美矣而未盡善也居家馭衆當令紀綱法度截然有章乃可行之永久若使姑婦勃豗奴僕放縱而爲家長者僅含默隱忍而已此不可一朝居而況九世乎善乎浦江鄭氏對大祖之言曰臣同居無它惟不聽婦人言耳此格論也雖百世可也○古今同居者又有漢樊重晉郎方貴俱三世

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

博陵李幾七世河中姚氏十三世宋會譽承詢十
九世而魏楊播百口共爨陸象山累世義居又不知
凡幾代也録之以媿悪婦劣子之欲析産者云々萬
姓續譜二卅八巻十丁左陽韻張字唐部張公藝壽張人九世
同居高宗封泰山還幸其宅問曰何爲九世不分藝
書忍字百餘以對云々與清按張公藝の忍を守り
鄭氏の婦言を用ひて累世義居せらハ實ま稱
嘆すべし陸象山の家法は本朝の豪富家ま似
ざるものさこゆゑ遺教經ま忍之爲德持戒苦
行不能及能行忍者乃可爲名有力大人若其不能

歡喜忍受悪罵之毒如飲其露者不名入道智慧人
也云々注ま傳大士云忍心如幼嬰辱境若龜毛常
能作此觀逢難轉堅守誠哉是言也云々周書牧誓
ま王曰古人有言牝雞無晨牝雞晨惟家之索云々
孔安國傳ま言無晨鳴之道索盡也喩婦人知外事
雌代雄鳴則家盡婦奪夫政則國亡云々なと古書
の所見おほく毛詩まも婦之長舌維厲之階まゝ
哲婦傾國などもあり

第二をふしまづ生ひ出ずる

永久次郎百首杵歌ま皇后宮少進源朝臣兼昌

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4
ガラス使用

片岡の枝ふしまじりなる生（お）しげる柞（ははそ）の小枝初もみぢせり按此歌夫木抄十五巻秋部五柞の条なる載（のせ）さり枝ふし小柴（こしば）まで小は細小の義こゝの小柴（こしば）雑（まじ）て生繁りたる柞（ははそ）の初紅葉せるよしなよめり

第三霜を

新撰六帖第十帖冬雨の歌なる信實

けふ小又山の朝けの霜をれなる空のさくもり

雨小ふりたゝ小按言塵集四巻廿三丁左霜の条なる霜くつもるとゝ小霜柱の折（をれ）るゝ霜をゝとゝもいふと見ゆ藻塩草一巻霜部なる霜くづも霜をれ霜のたゞち（已上新六四と出し小れど注釋をくはへび霜をれ霜くづもとゝなる今の日のげどけのさまて雨のふらんといる忘るゝしおり

第四草のかき葉

拾遺集十巻神樂歌なひえの社なてよみ侍けり僧都實因

ねぎのくる比叡のやしろのゆふぐれき草の

のき葉もたとやめてきけ按ねぎのくるゐ願を
掛るこ木綿手繦といもんとてていひ出せり草のかき葉は草の片葉なり延喜祝詞式龍田風神祭祝詞ま天下乃公民乃作物乎草乃片葉ホニ至ル万云々まゝ天下乃公民乃作作物乎者五穀乎始氐草乃片葉ホニ至ル万云々大殿祭詞ま事問之磐根木根乃立知草能可岐葉乎毛言止氐云々六月晦大祓詞ま語問志磐根樹立草之垣葉乎毛語止氐云々遷却崇神祭詞ま語問志磐根樹立神乃片葉毛語止氐云々祝詞考上巻廿四丁左ま草之垣

葉と書ゐ訓を知らせ片葉と有ゐ義を以てこさて片葉ま至るまでといふまて云々大祓後釋上巻卅五丁右ま垣ノ字朝野群載ま破と書り此破字と又片とも書るとを合せて思ふまかき葉とハまづ凡て草ゐ大かゝ三葉五葉づゝなど並びて生る物なるまそれを闕取てゝ一葉など残りてあらさまを以ていふ詞まて意ハゝゞいさゝのの草の一葉までといふなるべし書紀まゐかゞ草葉とあそどもそゐ例の漢文さまま約めてのせゝるこ云々などあるまて知べし歌の意ゐ

今日吉の御社ゟ祈申事を草の片葉まつるも物
いとでよろき、神も納受しぬへのしとなり

第五鹿のとこゑ

曽根好忠家集（毎月集 九月）歌ゟ

よそみゝゟ左かのとこゑを聞しより秋ハか
なしきものと左りけき按異本ゟとこゑを左ゞ
ね又ハ左らねゟ作せり万代集（五巻 秋下）ハ一二の
句よそゟゝ鹿のとこゑと有左ゞね俊頼散木
奇歌集（五巻）ゟほくし舟なげきを積（ツミ）てもとるゟハ
あしやゟねても左ゞねをぞいる此歌袖中抄（十六
巻）催馬樂（律歌）なども載て異同あり歌林樸樕補
遺（志部ゟお）の条ゟ貫之人シレズ物ヲ思ヘバ津ノ國
ノ芦ノシバ子ノシバ子ヤハスルシバ子ハ芦ノ
シゲキ根也シバ子ヤハスルトハシゲク寐（ヌ）ハセ
ヌト也築紫ヨリノボルトテ津ノ國芦屋ニテ俊
頼ツクシ舟ナゲキヲ積テモトルニハ云々貫之
歌ハシゲク也音ヲ寐ニヨセテヨメリ俊頼ハタ
ケ生ハ、キビハムシバメ、シバ子シテカシマキシ
キマデ、世ナゾウラムルスベ、メヲシバメトヨメ
リ云々なと見ゆされど鹿の繁（シバ）音といをんより

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4
ガラス使用

とこゑの方まさるべし志らねとある本ハ疑な
き寫誤りこ散木集三巻ま田上ま㆓て鹿のこゑのを
るのま聞えけれバ
妻こふる鹿のとこゑまおどろけハかゐのま
も身のなりまける㆓那按夫木抄十二巻秋部ま
も載ㇾとこゑハ曽丹ぞ歌まよそ耳まとよみ散
木集の詞書ま遥ま聞えといひ歌まもかゐのま
もなどよみ〳〵れバ遠声の略のと聞ㇾれどとが
さとのげなどいふ詞を照し合せておもふま外
声の義まや万葉八の巻廿三丁右刀理宣令歌ま

物部乃石瀬之杜乃霍公鳥今毛鳴奴山之常影
尓物部ハ石瀬の枕詞まて武士の屯聚とかゝれ
り神武紀ま大軍集滿於㆓昊地㆒云々まゝ屯聚此云
怡波瀰莽ㇾなど見や石瀬杜ハ大和の名所こ鳴奴
の下蓋香ㇾしを脱せり鳴奴香ハなけのじと願
ふ意の詞こ常影ハ賀茂真淵説ま木陰の義と
し本居宣長ハ多乎陰の約まて多乎ハ多和とも
いひて山の多和美ゝる所こといへり今熟按ま
常影ハ借字まて外陰まや外山などいへる類ま
山の麓なとを指て山の外陰と云べし和歌童蒙

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4
ガラス使用

抄杜三部巻より跡陰ト書テヲモトヒモ又トカゲヒヨメレバ麓ノ心ニヤといへり綺語抄上巻坤儀部ヨ

あし引の山のとのげまなく鹿のこゑきこゆやハ山田もるにご此歌のとのげも麓などの心とて聞なれハ外陰なるべし和歌童蒙抄二巻冬部

冬夜歌ヨ

ヤマ里ハ夜ドコサエツヽ、明ニケリトガタメゾ鐘ノオトノスゴルハ山家ノ冬夜ト云心ヲ經信卿ノ讀ルニイヅカタゾト云べきヲトガタメゾトヨメルイカヾ云々王勝問三の巻廿九右ヨ今の世の言

ヨいづくをどことひいづもヲどもいづちいづのゝをどちといふハ此とがさもとやあらん云々按ニのとがさもとハ外方といふヨりうつりていづ方といふ義ヨなる成べしさて外方外陰などもいへバ外聲といひておのうのら遠きもるのなる聲の心ヨも聞ゆべし

第六さらゝヨ

古今集廿巻大歌所御歌ヨ

みまさのや久米のさら山さらゝヨなどぞ名いゝてし萬代までヨ左注ヨおもハ水の尾のお

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4
ガラス使用

ほんべの美作國うゝ云々按ニ此左注おほんべと
ハ大嘗のふ』を音便まんと』といへむこさゝれど此歌大嘗會の主基方の歌
まハあらでゝゞ戀の歌なり左注ハ後人の附會
なるべきよし續万葉論まゝいひしより催馬樂呂歌
美作歌まゝ美万左加也久女乃久女乃左良比也未左
良左良尓奈與也左良左良尓和加名波太衣之與
呂川代未天尓與呂川與未天尓とありて和加名
波太衣之なるを古今集古今六帖二帖山などま
ハゞの名ハたてじとしていさゝられさりさらさ

らはもと更といふ詞を重ていへるまて佐良は
新まの義復の義別まの義決ーての義の四種あ
りさらーもゝ同意まて頻なる心と殊更の心ま
用ゐるもあり又物の音まさいとおほし万葉集十
巻十七問答歌まゝ
石上振之神杉神佐備而吾ハ更更戀尓相尓家
留同十二巻四丁左正述心緒歌まゝ
我背子之將來跡語之夜者過去思咲ハ更更思
許理來目ハ面同十四巻七丁左ゝ武藏國相聞往來歌

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

ま

多麻河泊尓左良須氐豆久利佐良左良尓奈仁
曽許能兒乃已許太可奈之伎さらの歌古今六
帖拾遺集伊勢家集綺語抄などは引直して入
さり詞花集[恋下]和泉式部

竹のまもあらじふる夜はさらしまひとり
いぬべき心ちこそせね次郎百首穂田歌は仲實
そゝろ田のさ田かりてのゐいね月のさら
さらは秋と見もらん源賢法眼集は
さゞれ石のうへもわく水のあさゝらくさら

まとけぬ君の那此外歌は書なれ所見おほ
れどさまでいふようなれば引出ざて古今集
の歌の意は性靈集は美作國佐良庄ありて佐良
山もそこの山ゝ佐良佐良といえん序は美作や
久米の佐良山と地名もてはそべけさらさらは決
て万代までもとの名は立じとよめる戀の歌
こ催馬樂はては吾名はたゝえじとあるは祝の歌
ときこめ

第七さねきの花

藻塩草[九ノ巻七十六段]まさ木の花の条を擧て云

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4
ガラス使用

ねほ山のさねきの花ハけふもちりまが
ふらん見る人なしま万山のさねきのさねしよ
あ〳〵谷深き山のさねきさかき同事也
青山と名まこそたてれおのぼのら嶺のさな
さのいざわきてそ見もやさんひうけのさな
き云々按万葉の歌を擧ふるハ誤也万葉十巻十
右小
阿保山之佐宿木花者今日毛鴨散乱見人無二
此佐宿木ハ同書十三巻ま作樂花と書ふるを思
ひ合ハせバ作を佐ま誤ヨ樂を宿木の二字ま誤
せるものまて櫻花ごま〳〵同書十二巻十七丁右ま
白香付木綿者花物事社者何時之真枝毛常不
所忘此真枝真坂の誤ごさりしバ万葉まさねきと
あるハ共ま後の讀誤なるを藻塩草などまその
まゝを傳へて一種さる木のあるやうま注せ
ご

第八もとりあへバ
拾遺集九雑下巻源順ぉ長歌ま春ハいつとも志ら波
の波路ま行〳〵行のよひもとりあへびなり
まける舟のゐせ埃し君志ら婆あハきいまぶま

忘づ免しとあまのぼりなゐ打はいて引(ニク)としき
のばものいおもいじ云々此歌頌集(ショウシュウ)にも見ゆ如
とい舟のあかの事まてもきめなどより船中な
いりくる水こさればこれ歌な波路な行のよひとも
舟のこれをしとも沈免じとも縁語もてつゞけ
さり頼政集(群書類従二百四十寄船戀な
六下巻十二丁左)
こひしさい泊りも忘らでめぐ舟のゆふのく
ものハ涙なりゝりゆふこのくとい涙を舟のゆな
して掻取(カイとり)よしまや藻塩草(十七巻六
ふゆいとりあへば船な入くる水こ云々倭訓栞(十三段船具其外部

由部な舟な入し水をゆ』
忌さる詞也船(フナエ)湯(ユ)などいふも湯の義
具部な戸(音故和名抄十一巻)舟
斗也唐韻(ニ)云(ノ)涂(ニコ)(故布奈由(ノ)一漢語抄云(ノ)客水(ノ)水和物(ニ)也云々字
鏡集(二巻)戸部な戸(ニ)ト(ヘ)リ云々類聚名義抄(法下巻)戸
並(ニ)戸部戸(ニ)ト(ヘ)リ欤云々戸音故ト(ヘ)リ云云まゝ
斗部な戸音虎音故ト(ヘ)リ云々以呂波字類抄(九巻)
由部雑物門な戸ト(ヘ)リ洩(ス)舟中水(ノ)之斗(ニ)也云々節
用集(下巻)由部器財門な戸ト(ヘ)リ舟之汲水云々ま
ゝらなてゝ舟中の水を由(エ)とい(脱カ)ひそ(ホヽヽ)を汲取(クミよし)斗(ウツハ)を由

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

止利といふ事知べしさて安加（アカ）といふも奇異雑談集（三巻十三丁左）伊良虞（イラゴ）乃（ノ）とて鰐（ワニ）もとらせし事の条も波なほ高く打入ほど船のあかをかゆる事たゞ手もおのれなど見えて古き詞也頼政歌もよのくとよめるもあかまかもるといふ心なるよし雑談集の語をあぢはへてもおもふべし

第九なほの湯

拾遺集（九雑下巻）大中臣能宣長（ガ）歌もおなじほのまのうらさびしげなるそもくく世をしもおもひなほの湯のたぎるも忌をもかまへほいてよの身を人の身ふなして思ひくらべよ云々能宣家集もいたぎるゆ忌をもかまへつゝをたきも胸をもさましはゝ小作り世をさびしきのふ思ひなほ那須の湯をよせもり那須ハ下野國那須郡なて今も高名の温泉あり平治物語（三巻）頼朝擧（ル）義兵（ノ）条も九郎御曹司云々信夫（シノブ）ニ越給ヘバ佐藤三郎ハ公私取認（シタヽメ）テ参ラントテ留（トヾマ）り弟四郎ハ即（チ）御供ス早白河關固（カタ）テケレバ那須湯詣ノ料（ダ）トテ通り給フ云々参考京師本ニ白河關固（カタ）テケレバ那須

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

湯ト云山路ニカヽリテ通リ給フ云々などル見やさる我夫木抄（廿六雑八）巻温泉部ヨ題不知湯の濃よみ人志らべ

志かのなるなべのみやをもあむさべや人をはぐゝみやまひやむべくとあるより物ヨ信濃の名所とせるおほのり和歌名所追考（百四巻）下野部ヨ此歌を擧て初句下野やヨ作り異本信濃なるとありげヨ信濃なるヽ寫誤ヨて下野やの方を正しとゝべしたゞるゐをゝかまへつゝはたぎり湧湯坐を構るよしヨ故といふ詞をよせ

さる也湯坐は古事紀中巻垂仁の段ヨ亦天皇命ニ詔其后ニ言凡子名必母名何稱是子之御名ニ爾答白今當火焼稻城之時而火中ニ所生故其御名ハ宜稱本牟智和氣御子又命詔何爲曰足奉答白取御母定大湯坐若湯坐宜日足奉云々まゝ天皇因テ其御子ニ定ニ鳥取部鳥甘部品遅部大湯坐若湯坐は由恵と訓ざゆ傳廿四巻五十六丁左ヨ大湯坐若湯坐ハ人此云ハ吏衛トとあること訓ひがなり書紀雄畧巻ヨ湯人是ニ神代巻亦云ヘ彦火々出見尊取婦人ヲ爲乳母湯母及厩嚼湯坐凡諸部備行以奉養焉于時權用他

姫婦以乳養皇子焉此レ世ニ取乳母養兒之縁也と見
ゐ湯坐は兒ゐ湯を浴ゐる婦女と聞えゝり（右の神代巻の小
湯坐ある湯母は兒ゐ湯をつかはしむる者なり湯母は兒ゐ食しむる者なり
ゐむべきなりもあり其ゐとりて恵と云義ゐ坐の字彼
書る由もいのならんいまゞ思得ば若くは恵なるを由須ゐ
須ゐ湯の中ゐ坐てる由なれば由恵といふまやうなるほさゞの児をの
ず大若は大小といへんがごとし云々同廿五巻
九廿
丁ゐ大湯坐若湯坐此も上ゐ既ゐ出つ傳廿四の
左倶上なるハ此御子を治養奉る時の役人をい
五十六葉
ひ此なるハ其ゐ因て又別ゐ其名を負せて部を
定られゝりと見ゐ又書紀雄略巻ゐ湯人廬城部
運武人（湯人此とあるハ十五ゐ由恵と訓べく此
云史衛ゐ
は此部をいへりと聞えゝり又姓ゐ負り天武
紀ゐ十三年十二月大湯人連若湯人連賜姓宿禰
（続紀八若湯坐連家姓氏録ゐ若湯坐連とあり
主等賜宿禰と称姓
同祖若湯坐連謄杵磯丹杵穂命之後也（謄杵磯丹杵穂ハ旧
事記ゐ饒速日命の子名なり
とあ里て大湯坐宿禰ハ無し（続紀一
ゐ遠江國人若湯坐部
龍麻呂と云人見ゐ
云々按古事紀傳の説いまゞいひゆくさば湯坐
は湯居ゐて居ゐは後世居風呂ゐるといふがとく湯

槽(フネ)を構居(カマヘスエ)るをいふ也
ゑまる湯殿風呂場(ユドノフロバ)しゑ
ゑまる奉仕(ツカヘマツ)る役人をやがて湯人(ユビト)といひその徒
を湯部(ユベ)とし湯坐部(ユエベ)ともいふ大湯坐(オホユエ)少湯坐(ワカユエ)はそ
れも大小の品(シナ)を別てるなり上總の地名も湯坐
郷あるは湯坐部もありて名もおへるも
や今きさら津の里より二里むかひの所もと
のり温泉(イデユ)のいとぬるきぞありときけど土人な
らでハ知ものなしといへバさるいさゝかなる
温泉(イデユ)よりて郷名もよぶべくもおぼえず

第十ゑめく

夫木抄廿九巻雑十一も貞應二年百首水こめじ民部
卿爲家
秋深き山の夕霧ゑめじ
づのはるらん
按藻塩草九巻六十九条こも此歌を
出して下句ゑづくるらんも作れり此
方よろしのはるらんまてはきこえず契
沖法師が夫木抄首書も童(ワラハ)の葉を手もこ
き入て金もなれ米もなれとやらんいふ
木ありそれ欤云々

本草啓蒙廿二巻木部三　小柞木○イヌツゲ○ヤドメ（加州）（越州）○ヨメガサラ○ケヅラ（江州）○カシラケヅリ○カシラケヅラ共同上○ガニノス（播州）○コメツヽ（紀州）同名（多シ）○ハマツゲ（筑州）○ビンカ、（佐州）○ビンカ、ズ（信州）○ビンカラズ（三才圖會）○メハリギ（土州）○カシラツカミ同上○子ヂノキ○一名直脚黃楊（江陰縣志）○柘木（本草新編）○鑿木子（本草述）○山中ニ自生多シ小葉細長厚シテ冬枯ズ故ニ人家庭院ニ多ク栽（ウヘ）旅家殊ニ多植（ウヘ）夏月葉間ニ小白花ヲ開キ圓子ヲ結ブ熟シテ色黑シ又實ヲ結ハザル者アリ江戸ニテオホツゲト云又一種枝ニ刺アルモノアリ凡ソ柞木ハ山中ニ小大多シ大ナル者ハ稀ナリ材堅シテ色白シ大ナルモノハ板木ニ用フツケバント云櫛ニ造ルツゲノ櫛ト云或ハコツゲト云葉長一印材トス一種小葉ノ者アリ江戸ニテヤドメト呼ブ庭ニ栽ルニコレヲ二分上品トス一種尾張ツゲアリ一名カラツゲ（大和本草）アサマツゲ（勢州）コノ木勢州朝熊山ニ自生多シ人家ニモ多ク栽（ウヘ）木ノ高サ五七尺播州深山ニハ丈

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

餘十ル者アリ枝葉繁茂ス仆木ニ同ジ然レドモ柔軟ニシテ對生ス葉モ亦對生ス鋸歯ナクシテ柔厚末尖ラズコレヲ錦墅黄楊ト云江陰縣志ニ出云々

按阿波國ヨリ出ル黒ハゲトヨベリ今紀伊國ヨリ出ルハ古名ノ存セルニヤ

こゝに歌ヨカシラケハラバヒヨセヨヤ

與清曰爲家卿歌ヨカシラケハゲトヨメルハゲトヨマネシハゲノ類ヨリテ本草啓蒙ヨ柞木ヨ當タルヨノヽ大和本草十二上巻ヨ笑靨花ヲコバメノハナト訓ジさレど其名ハ近くして別物ニ笑靨花ハ遵生八牋十六巻花鏡首巻圖五巻廣群芳譜五十三巻ノ花譜ニモなどヨ見えて草花なれバ木のこめしてハあらじまゝ米櫻小米櫻大和本草附録ノ木類部ニもあれど夫木抄藻塩草などの体裁山木の中ヨ並出しされバ黄楊の屬のためしてなる事疑べくもなし

第十一太刀契

○小右記寛弘二年十一月十五日条ヨ子刻許隨身ノ番長若倭部高範自ロロ一來テ云ノ内裏焼亡者ヘバ仍テ驚キ馳參テ左大臣師相逢テ郁芳門内ニ相共ニ參入ス此間火勢

太猛下人云主上御神嘉殿者仍參着中宮同御座
云々人々云火起自温明殿神鏡所謂太刀并契不
能取出云々同十七日条
亡鏡僅有帯自餘焼損無圓規失鏡形又有大刀并
但魚符等少々在云々村上御記云天徳四季九月
廿四日焼亡云々廿四日重光朝臣申云罷到温明
殿所未見其上在鏡一面専無損徑八寸許頭有一口帯等甚以
分明露出縁破其之
上見之者無不驚感又求得太刀并等云々又以所
求得令納魚形二隻女官等或傍是非神也太刀四
柄室堺等並焼失只其口口
遺種々小調度金銀銅魚符契合卅九隻或銘発兵

解兵府其国或銘其官契皆作魚形相合如水契之
趣又有片々不合者又有鐘占合不者此焼損之所
致
云々廿五日清遠伊渉等令申又求得焼鏡一面
銅魚契卅余枚合前惣七十四枚雑劔卅柄此中可
又加金銀銅等小調度云々故殿御日記云恐所雖在火灰燼
之中曾不焼損云々鏡三面伊勢大神紀如件説
似三面云々同廿七日条
條院警蹕侍衛如恒左大將於
東門内仰御網可張由
如例但大刀契焼損納新韓櫃所持候也大刀只有
刃契無殊損魚符損或不損云々」

○中右記寛治八年十月条
廿四日云々亥刻大風

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

○頻吹忽聞西陣方雜人走叫之声而大風盛吹程存成諠譁之由不驚之處彌以大叫三人出直廬見之西陣方小屋等燒亡火炎高盛飛燼滿天云々内侍所并大刀契又置陣廊鈴印辛櫃七合殿上御倚子時管絃具等皆相尋処々以取出了云々同条裏書ゝ天徳四年九月廿三日庚申夜内裏初燒亡内侍所并大刀契鈴印累代寶物燒了但靈鏡不損従灰中求出也見御記云々」

○西宮記正月部上朝拜条ゝ辰刻天皇御南殿掃部司等置殿南簀子西四間云々

○北山抄拾遺雜抄上朝賀事条ゝ時刻御腰輿幸建禮門不候大刀契鈴等云々同五卷大嘗會御禊事条ゝ成刻鸞輿出自建禮門入自昭訓門於東廊壇上加腰輿云々大刀契同候之清涼抄云候否未詳而天長以來例皆持候云々同八卷射禮条ゝ式幸建礼門行此儀御腰輿不候大刀契及鈴云々ゝ大嘗會条ゝ行幸之間无警蹕等儀但候大刀契云々

○江家次第十五卷六丁右大嘗會条ゝ御迴立殿不奏鈴持候大刀契同候云々又同三丁卷十五同条ゝ少納言并左右將監自殿南庇進大刀契鈴等云々

○日本記略 村上天皇 記下 天徳四年九月、条々廿三日庚申
今夜亥、三刻内裡焼亡云々廿四日辛酉廢務三箇
○日又昨夜鏡二和名加之古止吉呂并大刀契不能
取出今日依勅令捜求餘燼之上已得其實但調度
焼損其、眞猶存形質不變甚爲神異即大藏省韓櫃
令奉納之云々同十月、条々三日己巳縫殿大允藤
文紀參申云去月廿四日依宣旨御坐賢所三所遷
御縫殿寮之間内侍奉納戚所三所一所鏡件鏡雖
○在猛火上而不破損即去伊勢、御一所、眞形無破損
○長六寸許一所鏡已湧乱破損紀伊國御神云々太
刀卅八柄、之中四柄、自清涼殿求出之卅四柄、自温
明殿求出之其中節刀契七十四枚、皆眞形也自背
中別兩各有銘併全不損長各二寸餘許八枚金十
○四枚銀五十枚銀塗物又有金銀涌乱一斗餘許也
左近少將源伊渉將監藤原佐理右近少將藤原助
信將監源時中藏人主殿助藤原爲光出納雀部有
方女官等同以祇候云々
○帝王編年記 十六 村上天皇 天徳三年条々九月廿
三日庚申夜内裏焼亡云々宜陽殿累代寶物温明
殿神鏡太刀節刀契即春興殿安福殿戒具内記所、

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

文書仁壽殿太一式盤皆爲灰燼人代以後内裏燒
亡三度難波宮攝津國東生郡藤原宮大和國高市郡今平安宮也
○遷都以後百七十年始有此災遺左右中少將鑒求
神鏡太刀契等重光奏云温明殿所破瓦上有鏡一
面徑八寸許頭雖有小瑕專無損闕規并帶等以分
明又求得太刀契又鈐印鎰辛櫃所取出也云々
○百練抄四卷廿四丁左寛弘二年十一月十七日条ゟ神鏡
燒損事令諸卿定申之太刀契同燒損令諸道勘申
云々同十三卷十二丁左安貞二年条ゟ正月九日太刀契
紛失之由有沙汰十四日藏人頭沿部卿親長朝臣
參向内侍所求太刀有鉄室握之物求出之如天暦
御記者已爲太刀欤云々二月八日奉納太刀契左
中弁有親朝臣左中將資季朝臣參内侍所云々
○禁秘抄上卷第二段太刀契事条ゟ匡房記顯實云鋒劒
三尺或二尺惣十其中一劒脊有銘北斗左青龍右
白虎其外不見是自百濟所被渡之二劒之一欤日
月護身之劒三公鬪戰之劒欤但節刀可在此外注
青龍之条似六典所稱之傳符若遣大將軍之時可
用歟通俊曰長德連署之説以之爲太刀匡房曰長
德連署不見欤已上鈐印同記俊實通俊曰件鈐太

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

有興物也或六角或八角云々已上上古少納言伺見欲又節刀鎗天暦帝付宝剣帯取不離御身云々誠我國至極重寶物也云々

○愚管抄五巻の平治元年条は尹明ハ左づの長櫃をまうけて玄象鈴鹿御笛のはこだいとけいのから櫃盈の御座乃御太刀殿上の御倚子などさゞし入て追さまゝ六波羅へ参りけゝバ云々

○内裏ハ信頼朝義師仲ハ南殿まて壷の目のぬけ〻る如くまて在けり後ハ義朝ハその時信頼を日本第一の不覺人なりけゝる人をたのみてかゝる事を仕出つると申けるをバにこゝろ物もえいはざりけり紫宸殿の大床ゝ立て鎧とり着ける時ぶいとけいの唐櫃の小鉤を守刀ゝ付〻りけるを師仲は内侍所の御体を懐ゝ入て持〻りけるたべその鉤おもぐしまいらせてもゝんその刀ゝはけて無益ことといひけゝバ誠ゝとて枝おこせ〻りけゝバ取て云々

○年中行事秘抄賢所雑事条ゝ天慶元年七月十三日今日戌剋内侍所自温明殿遷御清涼殿齋庚櫃

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

二合 自往古号之神明在内侍所相傳云 細櫃五合
伊世大神令分身也毎事霊験也
太刀契在此中云々 神鏡并大刀契事 条々天徳四年
九月廿三日庚申今夜亥三剋内裏焼亡廿四日大
臣以下参職御曹司等又昨夜鏡三并大刀契不能
取出今日依勅令捜求餘燼上已得其實但調度焼
損其眞猶存形質不變甚爲神異召大藏省韓櫃令
納又御鋺韓櫃三合令納外記局十月三日己巳縫
殿大允藤文紀參向申云去月廿四日辛酉依宣旨
御坐内裏賢所三所奉遷縫殿寮賢所三所一所鏡
侍御鏡雖猛火上而不一所眞形無損長六寸許也
湧即云伊世国御神

已湧乱紀国御神 契七十四枚皆魚形也自背中別各々有銘
枚金十四枚銀 併令所損長各二寸餘許八
五十枚銀塗物云々 内侍所數日御他所例条
々小野宮記云寛弘二年十一月十五日己未月食
皆既子時内裏焼亡主上中宮御神嘉殿火起自温
明殿神鏡所謂大刀契鈴不能被出云々少遷御式
御曹司而破損殊甚又幸朝所同月廿七日辛未
黄昏參内左府云御在所舎板敷下謂御在所忽有
犬産穢仍吉田祭并臨時祭停止内侍所穢間不可
奉渡撰吉日後日可奉渡者天徳焼亡時暫奉安置
縫殿左右近衛并寮官奉護移御冷泉院之後撰吉

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

日更奉渡仍彼例後日可奉渡又左右近衛弁史一人可護候由被下宣旨成二點自朝所幸東三條院太刀契鈴印等持候如例太刀契焼損納新韓櫃所持候也十二月九日癸未今日酉剋神鏡自大政官奉移東三條云々

○参考太平記二巻六丁左南都北嶺行幸条々毛利家天正本云元徳二年三月二十七日比叡山ニ行幸成テ大講堂供養アリ云々内記ニハ佐伯爲忠此次ニ員錙鈴ノ御馬ヲ引セラル其迹ニハ少納言藤原国持朝臣此次ニ太刀契ヲ持セラル此後ハ公卿ナリ云々

○桃華蘂葉可覚悟條々群書類従四百七十一巻四十六丁右ニ太刀契事大刀四柄者累代之霊剣也國家殊被重之如天徳記者雖焼損形質猶存仍或琢磨又或造加飾其時更不被出宮城是貴重之至也契者親王大臣及諸衛契符也天徳同以修補之魚符七十四候分入三櫃被加納太刀韓櫃中行幸時左右近衛將監持候是也以納内侍司印稱契櫃古典所載已以分明然有二合也云々

○傳宣草下巻群書類従廿七丁左本臨時事部ニ内侍所申請

○大刀契覆事云々

○後圓融院永和元年大嘗會記ス鈴ノ麥ト云フ事ハ天子累代ノ靈物ニシテ忽ニ行幸ニハカナラズ供セラルヽ、コノ鈴ハ以ナハチ騎使ニタブ太刀ハ以ヲ下ヘノ宝劔ニ節刀太刀ハ皆百濟ヨリ奉レルハルギノ劔破敵將軍ノ劔ナドイフ物ナリキ是ヲ以或ハ度々ノ変上ヨヤケ或ハ紛失シ侍ルヨヤ返セ〳〵無念ノ事ニ契ハ魚ノカヽチヨ似テ諸司ノ契符ナリホセシ今モソノ名ハノリニ但ソノ器物ヲトヾメテ如在ノ禮ヲ用ラルヽヨナルベシ云々

○與清曰大刀契ハ二物ニ大刀ハ百濟ヨリ奉ル靈劔四柄ヲイフソレヨ雜劔四十柄ヲ加テルノヲ四十四柄トホ記セルニ契ハ魚ノ形ヨ作リテ割符ヲシテ七十四候アリタキ諸司ヨ用ラル證據ノ割符ニ大刀契ノ辛櫃トハホノ二種ヲ納ルル辛櫃ヲイヘリ後ヨ一物ト思ヒ忘ノメテダイトケイトヨミホト文字ヲ假名ヨ引直シテダイトケイトヽ寫シ忘ノ免ヨラビサテ大

刀契は必ヌチイ[illegible]と讀て大刀と契との二物と
心得べし

第十二雷守所

○下總國香取社古文書ま

○廳宣ス　留守所并香取社神官等ニ
　可キ令ム下早ク以大中臣實政ヲ爲ス國行事職ト事
右以件實政補ニ國行事職ニ香取社御遷宮以後小破
之時者浪田宮物可シ致ス修理ヲ之沙汰且ツ建永永元例
且ツ任セ可進證文之趣ニ停止地頭新儀之濫妨ヲ以實政
補ニ國行事ニ可キ專ラ當社修理ヲ勤ム之狀所ニ仰如件留守所
神官等宜シク承知シ勿ニ違失ス以宣
　文永八年二月日
　　大介源朝臣

○廳宣ス　留守所并大須賀保直民等ガ所ニ可シ令ム下早ク以テ中
　臣重茂ヲ大須賀保御興作殿沙汰ス事
當社再拜申中臣重茂申ス大須賀保御興作殿事訴
○狀如シ此近來地頭爲ニ各別之間有リ限之在家等或稱シ
屋敷所ト或号シ一郎從之住敷猥リ令シメ抑留ヨクリュウセ件作殿用途ヲ之
間御神事之日定及ヒ闕怠ニ欣然者任セ先例ニ不嫌ハ在家
之新本ニ以中臣重茂平均可シ致ス其沙汰之由被ル下

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4
ガラス使用

御廳宣者也宜直民等承知敢勿違失故下ス
文永八年二月　日
大介源朝臣

○常陸國茨城郡吉田社古文書ヨ

○留守所下ス
可ヒ早ク令ム如ノ元領知セ長常ガ訴申ス田畠ノ事
合
田壹町
垣内壹所古国府西殿ノ本畠

右件田畠者爲稻久名田畠ト經年序ヲ畧スニ而長常帶レ證文ヲ可キ知行ス之由前々雖ド訴申ト如キ所帶證文者無ク道理ト之上關東御式條之狀廿年以後者不ル可ラ有沙汰ス之由爲リ明白ニ云ヒ此ノ彼ト云ヒ此ノ爲リ長常旁無ク道理ト之間無ク向後違亂如ノ元可キ令ム領知ス之狀如レ件

延應元年三月日

目代前筑後守平朝臣 花押

○留守所下ス
奉上ス正月八日吉祥御願請僧御布施料稻伍仟玖佰貳拾肆束事
三寶御布施三百束

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4
ガラス使用

講讀師并請僧御布施伍仟六百二十四束

右依大政官天平神護二年五月十七日延暦廿四年三月廿五日任兩度符之旨奉上所如件

嘉吉二年正月十五日　　弁所平（花押）

大掾平

○同國府中總社古文書ヨ

○廳宣ス　留守所ニ

可ク早ク任セ宣旨状ニ除ケ三社領ノ外不論神社佛寺以下免給等ヲ平均ニ宛催云々口建久以後新立庄園令ム進濟ス大嘗會用途料段別參升米ノ事

副ヘテ下ス

宣旨　院宣

右大嘗會者天下之重事諸國之課役口是以所被宛召段別三升米也早ク任セ宣旨ニ平均ニ令メ宛催ヲ早速可シ進濟ス兼又新立庄園并公田員數等委可キ令ム注進言上之狀所宣如シ件國宜承知不可ラ遅怠ス以テ宣ス

文永十一年六月　　仗惟宗朝臣

○留守所下ス

可令早ク任セ先度國宣旨ニ稲富名椙大夫高家ガ孫

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4

ガラス使用

□□成光進退領知田肆段畔事

右件田者依爲稻冨名内先國司花山院大納言家之時可被返付本名之由有御下知被付畢但件田四段者爲彼名内者也而洩先度御下知之間類地之上者同可蒙御下知之由依申如元所宛給也仍可令進退領知之狀如件

弘安八年正月廿九日　國司代左近大夫將監橘朝臣（花押）

按楫大夫は總社の神主職と當社の貞和四年三月大掾高幹の狀を以師家所被補楫大夫也とあり

○留守所下ス

可令早總社神主師幸進退領掌致御近忠當社御敷地内田畠事

合

田參段屋敷壹所　買主ときの

田參段　買主石崎彌二郎

屋敷壹所　買主山本

右買主等雖申子細質券賣買之地事關東御徳政嚴密之上御祈禱之地爭可及非器之知行哉就中

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

□□府中、田畠等、者國衙一圓進止之条關東度々
御成敗之□留守所裁許何可有豫議哉早、師幸如
元、令進退領掌、可令勤仕御祈禱之状如件

永仁五年四月一日　　秩所右衛門尉

大掾平

目代藤原（花押）

大介藤原（花押）

按□此、文中留守所、裁許といふ事有
○廳宣、留守所、
可下早、以留守所御館、跡南、半分并久松、名云田
畠事
内宮部高根青屋□□作□及同池袋一丞
本給田一段爲惣社、二、丞處也二、丞子々
件、給田畠者宛給常陸國、惣社、二、丞處也二、丞子々
孫々無相違令進退領掌、彼給田畠、可令勤仕神事
國役之状所宣如件

正安二年五月二日

按□此文中留守所御館とあり留守所は
國司代目代などの事執行ふ役所なる
事知るべし

○留守所下ス
可レ早ク以ニ惣社神主師幸ヲ一令レ知ニ行領掌ヲ一森南北屋
敷ヲ一抽中御祈禱忠勤ノ事上
右屋敷者國衙重地、之地也而依ニ敬神之儀ニ一以テ神主
師幸ヲ一可キ令メ下知行領掌ヲ一抽テンス天長地久國吏安穏留守所
恭平御祈禱忠勤ノ之上状如レ件國宜ク承知メ、敢テ勿レ違失スル故ニ
以テ下ス

正安三年九月廿七日　目代前能登守平朝臣（花押）

按國吏安穏留守所恭平とあるまても
留守所は國衙なること疑なし
○與清曰留守所の事源平盛衰記四巻白山、神輿登山
の条其外物ニ見えたるハ枚擧ニ遑なし今ま
のれを考ふるに國司の廳ヲヤシキなるハ國守ハ在國
せずして國司代目代などを置て國政を執行ハ
しむるゆゑ留守所とハいへるこ
第十三和與ワヨ
○右記扉書類従四百四巻卅三丁左房官與ニ修學者一列座上下相
論事、条ニ此種々、儀悉ク以テ相ニ叶ヒ和與道ニ存レ此、旨ヲ毎事
穏便ニ可キ遂ニ交衆ヲ一也云々

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

○明月記寛喜元年十二月十日条ニ年來和與之間
示付此兒吏云々
○源平盛衰記卅七巻十九丁左則綱討盛俊条ニ則綱思
ケルハ維盛ヲ待付テ盛俊ヲ討タラバ二人シテ
討タリト人ノイハンモ本意ナシ和與シテ命ハ
生メレ共トテモ遁ルマジキ盛俊也鹽谷ニ取レ
テ云甲斐ナシ後ノ世ヲコソ吊ハメト思ヒ云々
○貞永式目擇書類従四丁右不論親疎
○主子孫事条ニ憑人之輩被親愛者如子息不然者
又如郎従欤爰彼輩令致忠勤之時本主感歎其志之餘或渡宛文或與譲状之處稱和與之物對論本
主子孫之條結構之趣甚不可然云々清原宣賢環翠
尤斬也式目抄七十丁右ニ和與ハアマナヒ與ル也財寶
ニモアレ田地ニテモアレ眞箇發氣シテアルヲ
和與ト云法意ニハ和與ノ物ハ親疎ヲ論ゼス取
返スマジキト云リ和與トヤハラギアタフル
トヨム彼眷養セラルヽモノヽ志ヲカンジテ心
オチニ所領ノアテブミ又ハ資財等ノユヅリ状
ヲアタフルハフシヤウニアラザル忠ナレバ和
與ノ物ト云也眷養セラルヽ者ガ此法ヲモテ和

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

與物ナレバ取返サレマジキト本主ノ子孫ニ對
論スル也古法ニ違テ此式目ニハ和與ノ物ナリ
トモ取返セト云リ永代ノ文言アラバ本主ノ子
孫ニ對論スルトモ取返スマジキカト云々延應
二年ノ追加ニ和與ノ物ハ不悔返之法ナレドモ
敵對ニ及バヽ可任本主意之由被定之然ラバ永
代ノ文言アリトモ取返スベキ也云々まゝ七十
一丁
右兄弟姉妹和與物悔返事右如法意者彼和與
物難悔返歟但或依成父母之禮讓與所領或偏以
恩顧之儀讓得所帶之輩等忽忘教命及敵對者猶
可任本主意將又就證文可有子細歟○追加○他
人和與領事文永九十二十一評以御恩之地和與
他人之条兩人同心之趣非無不審所詮被尋究其
由緒之時或爲報累年之芳心或爲謝當時之懇志
兼日契約之条無其隱者不及子細若親昵之儀無
所據者可被召和與地也且存此趣可申沙汰之由
可相觸五方引付頭人之旨可被仰城介歟○他人
和與領事文永十六一〇右閤子孫讓他人之条結
構之趣非無斟酌不謂御恩和與領向後可被召和
與狀地但兄弟叔姪之近類者非禁制之限又雖爲

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

傍官並遠類之子息年來爲猶子令取養者不及子細矣○和與他人物可悔返否事於相憑人之輩者不可對論本主子孫之由被載式目畢此外和與他人之物任法意不可悔返歟是又就證文可有斟酌歟○讓與兄弟叔姪所領事正應三十一九稱和與之地本主不悔返之由雖有其沙汰自今以後宜任本主之意歟云々

○法曹至要抄中卷廿六丁左雜事条々和與物不悔還事云々名例律云取與不和若乞索者云唯和與人無罪云々

○常陸吉田社古文書ゟ

和與

近衛北殿御領常陸國吉田社領雜掌祐眞與同社神宮寺別當權少僧都成珍相論當寺別當職再成珍知行分山本鄉御年貢及檢注事

當時者本所一圓爲御進止之處假御家人之号不隨領家所勘之間就訴申之依爲公家武家兼帶所職帶關東御教書等之上者非本所一圓進止之由成珍捧陳狀之間雖番一問答以和與之儀任先例向後奉轉讀每年四季大般若經可捧卷數之由

依出狀止訴訟者也次山本鄕内成珎知行分御年貢正和五年以來對捍雖訴申之致弁之由令出帶年々請取畢及檢注事可依惣鄕側之旨令申之上者同止訴訟畢若背和與狀御祈禱不法懈怠候時者立還本所可申子細者也仍和與狀如件

元徳三年八月廿四日　雜掌阿闍梨祐真

按十九せい吉田社領の雜掌祐真と神宮寺別當成珎の相論の和與狀と和與は今俗中直り又は内濟などいへる類と

○尺素往來群書類從百四十一巻十本領事狀は神明寄進佛陀施入他人和與庶子劃分地者不可有悔還改動之儀云々

○節用集上巻和部言語門は和與ワヨ云々

○運歩色葉集和部は和與ワヨ云々

○與清曰和與は環翠軒宗尤はあまなひあふるとも注し式目抄七丁右こともやはらぎあふる事をいふといへり赤鳥隨今按は和談ける義なるも和談ける伊勢丈貞は相共は和談ける事をいふといへり筆下

○和與物とは和談ける義なるも和談ける事のひざまの一樣なるもありて古書のはのひざまの一樣なるもありて與へ分別はべし和與物とは和與へ

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

る物心和與狀は和談狀之
第十四稅所
○常陸國府中總社古文書ゟ
留守所下ス
可キ令ム早ク總社神主師幸進退領掌セ致シ御近忠ヲ當
社御敷地内田畠ノ事
合
田參段屋敷壹所買主とさ、
田參段買主石崎弥二郎
屋敷壹所買主山本

右買主等雖レ申ト子細ヲ賣券賣買之地事關東御徳政
嚴密之上御祈禱之地爭可レ及ニ非器之知行ニ哉就中
○府中田畠等者國衙一圓進止之条關東度々御成
敗之口留守所裁許何可有ニ豫議ニ哉早師幸如元令ニ
進退領掌可キ勤仕御祈禱之狀如件
永仁五年四月一日
税所右衛門尉
大掾平
目代藤原（花押）

大仏藤原（花押）
○留守所下ス

○早可令勤仕五位職事
小三郎大夫清原師親
右、以人五位職令補人之處也仍在廳官人等宜承
知不可違失以宜状如件
正和四年六月廿一日　　秡所平　花押
　　大掾平　花押
　　目代

○留守所下ス
清原師貞
右、以人所被補任五位職也仍任先例可令勤仕其
役之状如件
貞和三年十一月日　　秡所平　花押
　　大掾平
　　目代

○同國吉田社、古文書ヨ
可令早秡所新左衛門、尉平、廣孝領知上野國
大宝庄庫神澤後閑、内田貳町參段在家貳宇
武藏國賀美郡長濱、郷内赤洲村、内田陸段在
家壹宇事
右、任亡母丹治氏宝治二年十二月三日、譲状神澤
内田

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4
ガラス使用

在家之載
由良六郎經氏弘長三年七月和與狀赤洲田地并在
家事之載
可令領掌之狀依仰下知如件
文永三年十二月十一日

按相摸守平朝臣(花押)
條政村ニ此文中稅所の領知の事并和
與狀の名目等見ヘ和與狀は和談中直
りの狀ニ

○まゝ

相摸守平朝臣(花押)
左京權大夫平朝臣(花押)

常陸國吉田社田所職半分稅所式部
右任ㇾ由緒ㇾ知行不ㇾ可ㇾ有ㇾ相違ㇾ次於ㇾ社役ㇾ者守ㇾ先例ㇾ不
ㇾ可ㇾ有ㇾ退轉之狀如ㇾ件
應永廿八年十一月六日 平滿幹(花押)
稅所殿

按平滿幹ハ常陸大掾ニ此文書を考ヘ
ハ稅所式部二郎ニて吉田社の田所職を
兼帶しゝるニ

○まゝ

切手御得分雖ㇾ田數陸拾漆町壹段ㇾ候ㇾ此ㇾ内貳拾町

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

切手分として進之候相殘四十七町壹段之所者
室田筑後方下向之時可申談候也恐々謹言

正長二年八月十日　　大使文世（花押）

税所殿
御宿所

○まゝ

按大使文世文安五、廿一の文書まゝ
一志、文世とあり室田筑後方の方字ハ
様といふも同義ことせい伊勢神宮よ
り下さる使ゆやとおぼゆ

税所殿へ渡申候切手鄉事
右常陸國北郡内上鄉吉生、鄉柿岡、鄉沼田、鄉高
倉、鄉河俣、鄉彼、六箇鄉ヶ田數陸拾漆町壹段之分
入野殿正殿御口承之間此、在所ヶ任先例御所務
とて可被召候仍爲後日如件

永享六年八月七日　　文世

税所殿

按税所の所領の事此文まて推量べし

○まゝ

就其方事委細承候感悦至候仍京都へ致注進候ハヾ

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4
ガラス使用

者定可有御感候哉彌被致忠節候者於恩賞者速
可申沙汰候恐々謹言
嘉吉元年三月八日　　清方（花押）
鹿島税所殿

按清方ハ上杉兵庫頭の事まて結城を攻る時の書狀こ

○すゝ

留守所下
奉上正月八日吉祥御願、請僧、御布施料、稻伍仟
玖佰、貳拾肆束事

三寶、御布施三百束
講讀師幷請僧、御布施伍仟六百二十四束
右依大政官天平神護二年五月十七日延暦廿四
年三月廿五日任兩度符之旨奉上所如件
嘉吉二年正月十五日　　税所平（花押）
大掾平

按此文書ハ税所より大掾の方を掲て書るれバ税所ハ大掾より下職なる事知るべし

○すゝ

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4
ガラス使用

稅所殿へ進候切手可田數内雖所治田高倉十八町二段右此内、八町二段右依稅所殿申談候眞壁郡内竹來郡田數八町二段六十歩へ相換申候於伊勢役者可有御所務候仍爲後日相換申候狀如件

文安五年五月廿一日　大使一志文世（花押）

稅所殿

按一志文世は伊勢大神宮より諸國へ下さる、使の内なるべし一志は伊勢の地名なればよし有

○與清曰稅所は吉田社古文書は草假名なてさいをよと書ふせバさいをよと訓ふせバさいをよと訓べしせいをよと訓ハ訓べからざるいまゝへの郡司の遺風なて賦稅の事を司る役人と見ゆるその中神社の田所職などを兼帶せるもありしこ稅所の上席は大掾ありしハ介の差次の官人なせど後ハ平國香の子孫常陸ゟ住て代々大掾の官を相承せるよし府中總社古文書中安貞元年十二月廿六日北條武藏守同相模守ゟ常陸の前司ゟ下せる鎌倉殿御執達の狀ゟ見えたりさて介上ゟありて

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4
ガラス使用

大掾其次ありて祝所其下ゟ若干人ありし成べし

第十五雩　アマゴヒ

雩は請雨祭之日本紀天武紀下巻十二年五月条ゟ

雩アマゴヒスと訓その外ゟ然よみ〳〵るおほの里

○日本紀廿九巻十天武紀六年五月条ゟ是月早之於京及畿内雩之云々ゟ〳〵同丁左十七八年六月条ゟ壬申雩云々ゟ〳〵廿一六月戊寅の条ゟ是日雩之云々ま〳〵廿五十年六月条ゟ乙卯雩之云々ま〳〵

廿四丁右十二年七月条ゟ庚子雩之云々ま〳〵是月始テ至八月旱之百濟僧道藏雩之得雨云々

○持統紀六丁二年条ゟ秋七月丁巳朔丁卯大雩旱也丙子命百濟沙門道藏請雨不崇朝遍雨天下云々

○按此以下諸書の所見枚擧ゟ遑なけゼバ省きつ請雨をアマビキと訓〳〵るハ類聚名義抄字鏡集などゟ見えて雨引の義ニ

○拾芥抄下本諸社部ゟ祈雨十一社應和三年七月五日火雷水主　水嶋乙訓已上山城　平岡恩智已上河内

廣田生田長田笠摩垂水攝津云々

按二十二社註式（擇書類従廿二巻丁左ニも祈雨十一社を載てハおなじ自注ニも人皇六十二代村上天皇治十七年應和三年癸亥七月十五日之例とあり

○年中行事秘抄（下巻）祈雨事条ニ月令ニ云仲夏命樂師脩鞞鞉鼓均琴瑟管簫命有司爲民祈祀山川百源大雩（陽氣盛而恒旱山者水源）ヲヽ請雨經法事条ニ天長元年天下大ニ以テ旱魃空海和尚可修請雨經法之由被下勅宣而守敏大德奏狀ニ云守敏已是上臈也同學此法須先勤仕者依請早修者即以勤仕經七个日結願之朝雨京如闇夜雷響尤盛也甚雨成洪水衆人所感也但遣使令檢知之處只雨京内不及山河亦空海和尚勤仕雖經七日專無雨氣和尚入定思惟守敏大德驅取諸龍咒入水瓶也於是延修二个日夜和尚告曰池中有龍号曰善如是無熱達池龍王之類可勸請也件龍爲人有慈不致害心貴眞言奥旨從池中現其形是則愍地成就也彼現形如金色長八寸計此金色龍居在長九尺許雖蛇頂見之弟子實恵眞濟眞雅眞紹賢恵眞然等也自餘弟子不

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

敢能見具注此由奏聞少時之間給勅使和氣真綱
以御幣種々物等奉供龍王結願之日重雲覆天雷
鳴四方急降膏雨池水涌滿至于大壇之上自是以
後三个日之間普雨天下爲賀其功三月廿五日任
少僧都不經律師和尚云此池龍王若移其他界池
淺水減世薄人亡恒旱常疫方至此時不令知公家
末代弟子冝加禱請

按性靈集抄本六上卷天長皇帝於大極殿堀百僧雫(ス)
願文あり西宮記臨時部一江家次第十二禁秘抄下卷
などその外祈雨止雨の式作法を記せる書おほ
のれどさまでいふようなれバ引出ズ

○字鏡集一卷雨部ヨ雫雫同アマビキアマコヒ云々

○類聚名義抄法下卷雨部ヨ雫音于又云句反アマゴヒスアマヒキ云々雫正云々

○和玉篇下卷雨部ヨ雫ヒテリマツリアマゴヒ云々

按アマゴヒは雨乞の義アマビキハ雨引(アマビキ)の義にて此訓持統紀ヨも見ゆもじは雫とも祈雨とも請雨とも通用せり

○爾雅釋訓注疏本三卷十四丁右ヨ舞號雫(ス)也注ヨ雫之祭舞者吁嗟而請雨雫音于疏ヨ孫炎云雫之祭有舞有

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4
ガラス使用

號左傳云龍見而雩服杜皆云雩之言遠也遠爲百穀祈膏雨月令仲夏云大雩帝鄭註云雩吁嗟求雨之祭也郭云雩之祭舞者吁嗟而請雨是同鄭說也云々

○春秋桓公五年註疏本十六卷十丁右ゟ大雩註ゟ傳例曰書不時也失龍是之時雩音于祭名云々左傳同卷十五丁左ゟ秋大雩書不時也註ゟ十二公傳唯此年及襄二十六年有雨秋此發雩祭之例欲顯天時以指事故重言異於凡事云々疏ゟ正義曰下三句謂雩掌丞也雩是祭天嘗丞祭宗廟也云々

○禮記月令註疏本十六卷四丁右ゟ仲夏之月云々是月也命樂師脩鞉鼙鼓均琴瑟管簫執干戚戈羽調竽笙篪簨虡鐘磬柷敔命有司爲民祈祀山川百源大雩帝用盛樂乃命百縣雩祀百辟卿士有益於民者以祈穀實云々註ゟ陽氣盛而常旱山川百源能興雲雨者也祭水始所出爲百源必先祭其本乃雩雩吁嗟求雨之祭也雩帝謂爲壇南郊之旁雩五精之帝配以先帝也自鞉鼙至柷敔皆作回盛樂八他雩用歌舞而已百辟卿士古者上古若句龍后稷之類也春秋傳曰龍見而雩雩之正當以四月八周之秋三月

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4
ガラス使用

之中而旱亦修雩礼以求雨因著正雩此月失之矣
天子雩上帝諸侯以下雩上公周冬及春夏雖旱礼
有禱無雩云々疏ɜ命有至穀實正義曰正以將欲
雩祭故先命有司爲祈祀山川百源爲將雩之漸重
民之義也故先爲民大雩帝用盛樂者爲民祈穀後
天子乃大雩天帝用上鞀鞞之等故云用盛樂乃命
百縣雩祀百辟卿士者謂天子既雩之後百縣謂諸
侯也命此諸侯以雩祀古之百辟及卿士等生存之
日能立功有益於人者註陽氣至無雩正義曰以四
月純陽用事故云陽氣盛而恒旱故制礼此月爲雩
縱令雩祭時不旱亦爲雩祭云雩以吁嗟求雨之祭
者以雩音近吁又女巫職云凡邦之大哉歌哭而請
歌哭則吁嗟之類旱又是大哉故須吁嗟求雨註春
秋者以雩爲遠謂遠爲百穀求雨非鄭義也云雩帝
謂爲壇南郊之旁雩五精之帝者以雩是祭天當從
陽位以五天總祭不可偏在四方故知在南郊也以
春夏秋冬共成歲功不可偏祭之天故雩五精之帝
以自外至者無主不正當以人帝配之大暵配靈威
仰炎帝赤熛怒黄帝配含樞紐少暵配白招拒顓
頊配汁光紀故云配以先帝也云凡他雩用歌舞而

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

已者案女巫云旱暵則舞雩是用歌舞正雩則非唯
歌舞兼有餘樂故論語云舞雩詠而歸是也云百辟
卿士古者上公句龍后稷之類也者百辟則古之上
公則國語酇爲祭伯而礼記祭法有祀之文社稷五
祀雖爲王朝卿士兼帶上公之官故左氏云封爲上
公祀言爲貴神是身爲百辟又爲卿士案左傳有社稷
五官今直云若句龍后稷不云句芒蓐收之等舉有
益於民功之顯者言之引春秋傳曰龍見而雩者欲
明正雩在四月不在五月也云凡周之秋三月之中
旱亦修雩礼以求雨者釋此經大雩在五月之中爲
五月不雨修雩祭作記者言五月之雩是常雩故記
之於五月也云天子雩上帝者以此云大雩帝也云
諸侯以下雩上公者此云乃命百縣雩祀百辟卿士
是也云周冬及春夏雖旱礼有禱無雩者案春秋周
七月八月九月皆書雩穀梁不譏成七年冬大雩穀
梁云無爲雩是譏其冬雩是冬無雩也春秋周之春
及周之四月五月皆無雩文春夏不雩雖旱不爲修
雩之祭其周季夏當有正雩則龍見而雩是也案春
秋桓五年秋大雩傳云書不時服註云雩遠也遠爲
百穀祈膏雨言大別山川之雩也僖十一年秋八月

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4
ガラス使用

大雩十三年秋九月大雩成公三年秋大雩七年冬大雩襄五年秋大雩傳曰旱八年九月大雩傳曰旱十六年秋大雩十七年秋九月大雩二十八年秋八月大雩傳曰旱昭三年秋八月大雩傳曰旱六年九月大雩傳曰旱八年秋大雩十六年秋九月大雩傳曰旱二十四年秋八月大雩傳曰旱二十五年秋七月上辛又雩傳曰秋書再雩旱甚定元年秋九月大雩七年秋大雩九月大雩十二年秋大雩僖二十一年夏大旱宣七年秋大旱莊三十一年冬不雨僖二年冬十月不雨三年正月不雨夏四月不雨六月雨

傳曰自十月不雨至于五月不雨曰旱不爲災之文二年自十有二月不雨至于秋七月十年云自正月不雨至于秋七月十三年云自正月不雨至于秋七月是春秋之中不雨有七大旱有二大雩有二十一都并有三十莊三十一年冬不雨以冬時早氣以過故不數僖二十一年夏大旱宣七年秋大旱二旱災成故不數昭二十五年一月再雩祇是一旱之事爲再雩一雩不數定七年秋大雩亦一時之事而爲二雩一雩不數成七年冬大雩穀梁云冬無雩明亦不數三十之中去此六年不數唯有二十四在就二十四之

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4
ガラス使用

中分爲四部桓五年秋大雩說雩礼是一部也僖二
年冬十月不雨僖二年正月不雨夏四月不雨說禱
礼是二部也文二年文七年文十三年皆云正月不
雨至于秋七月說旱而不爲災是三部也此三部總
有七條於二十四去七條餘有十七條說旱氣所由
故鄭癈疾云春秋凡書二十四旱考異郵說云分爲
四部各有義焉是其事也凡正雩在周之六月常事
不書書秋大雩傳不云旱者皆過雩也傳言旱者皆
爲旱修雩也雩書月者爲修旱雩得礼故定元年穀
梁傳曰雩月雩之正也秋大雩非正也案玉藻云至

于八月不雨君不舉註云建子之月不雨盡建未乃
始成災而僖二十一年夏大旱未至建未而爲災者
若霧露霑濡壟中有苗雖歷時不爲災也文二年十
年十三年自十二月正月不雨至秋七月是也至八
月不雨乃爲災若無霧露霑濡壟中無苗雖未至八
月則爲災故僖二十一年夏大旱是也穀梁說云得
雨曰雩不得雨曰旱公羊說言雩則旱見言旱則雩
不見此二家之說不同鄭釋癈疾從穀梁之義雩之
與禱所以異者考異郵說云天子禱九州山川諸侯
禱所封內大夫禱所食邑又公三時不雨帥羣臣禱

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

山川以過自讓凡雩必先禱故此經云乃命百縣祈
祀山川百源始大雩帝是也禱不雩僖公二年冬十
月及三年春正月夏四月直爲雩以非雩月故不雩
云々

○說文（眞本十一卷七丁右）雨部曰雩夏祭樂于赤帝以祈甘
雨也从雨于聲羽俱切云々

○清人秦蕙田の五禮通考、廿二、卷（吉禮廿二）大雩、祭を蕙
田案月令曰大雩帝左傳云啓蟄而郊龍見而雩即
詩頌所謂春夏祈穀于上帝也其礼天子諸侯皆有
之然天子所雩者上帝故曰大諸侯特雩境内之山
川不名曰大春秋書魯大雩僭礼也孟夏大雩雖
無水旱亦行之礼之常也若國大旱則無論夏秋皆
得雩至冬則無雩故穀梁子曰冬無爲雩也春秋大
雩二十有一書雩以記災書大以志僭然古聖王遇
災而懼爲民請命當水旱時靡神不舉又不止雩上
帝而已周礼以索鬼神爲荒政十有二之一後世不
知恐懼修省反躬罪己乃有焚巫徙市之事抑末矣
漢無雩礼而旱祭非一至齋梁乃有雩壇而所雩有
五天帝五人帝皆非古義唐有正雩有旱禱衆以雩
帝爲大祀明嘉靖有雩祭雖不盡古然亦近焉云々

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

○與清曰雩は天武紀をはじめて見えて雨請(アマゴヒ)のまつる神を祭る事こ請雨祈雨などいふはおなじ和訓なりアマゴヒともアマビキともいへりもと漢土(カラクニ)の名目なり据(ヨリ)たるなれど其祭の作法はこと〻し西宮記江家次第禁秘抄の類ものおほく見えさるを考合せて知べし

第十六朽木形(クチキガタ)几帳

○往吉物語(舊書類從本)四十六丁右に紙(カミ)ひやうぬ大和(ヤマト)繪のきさ〻る一よろひ立(タテ)て母屋のみたる朽木形の几丁(チャウ)のふひらのけていとをあるべう〳〵忘づらひ

○濱松中納言物語三巻十五丁左に宮の御方まさ〻かぬへそば夜目(ヨメ)いさるからなてなづのはしかりけり柴垣のもつのふあばそ殘るの露したまるまじくあそさ〻れるなどいのでのかくて人のにごーのふらんとあいもる見やるがいまいる所ぞらまぶまあらばふりまさるけしきなる○朽木形の几帳のこ〻ろとへまけるを忘そへはれたきのよふみにのうちなまとなくほり出て佛の御まへの名香のまはひもひとへ

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

○あひてさだめあてはかなるうちのけしき
も思ひやりあいきやうなり云々
○紫式部日記傍註本上巻十八丁左
形の木丁そいのさまなどよひはおもて朽木
をうへふ着ふり云々人々はこきうちもの
○榮花物語巻二の枝一丁右
いみじうあをやぎのさまなどきしもの春はいう
もをぎとなきやと見やも云々同若水五丁右
んでんを見をばみにいと青やぎのなるふ朽木形
の青紫(アヲムラサキ)ははへるより女房のきぬのつま袖口(ソデクチ)

かさなりなほ外よりはいまさりて見ゆる
云々
按ずるに枝の巻若水の巻共に正月の事に
○枕草子春曙抄五巻四丁左
なまめかしき物の段に青やかなる御簾(ミス)の内ふ水帳の朽木形いとはやいのなてかいてさるひもの風に吹なびかされふるいとをかし云々
○舊本今昔物語廿四巻第一語延喜御屏風伊勢御息所讀和歌(ヨミウタ)語に三月許(ホド)ノ事云々簾(スダレ)ヲ掻(カキ)上テ見レバ母屋(モヤ)ノ簾(スダレ)ハ下(オロ)シタリ朽木形(クチキガタ)ノ几帳ノ清氣(キヨゲ)ナル

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

三間許ニ副テ立タリ云々同冊一巻第五
生宗岡高助傳ノ娘語ル五間四面ノ寢殿ヲ造テ其
○レニ高助カ娘二人ヲ令シ住メ其寢殿ヲ口タル支帳
ヲ立テ冬ハ朽木形ノ几帳ノ帳惟ヲ懸テ夏ハ薄
物ノ帷ヲ掛ケ云々
○長秋記長承三年十二月四日条ニ御出家後御几
帳ノ帷用ニ青鈍然而今度被用朽木形是下官所申行
也自余所々鋪改裝束准例云々
○左經記万壽五年四月一日条ニ御几帳惟六帖云
々並御帖等青鈍色令調献宮ニ日来朽木形帷也云々

○禁秘抄上巻七丁左清涼殿条ニ帳四面有几帳惟夏ハ
生以胡粉畫花鳥冬ハ朽木形畳三帖綾綱御座敷東ノ
上云々階梯二巻十八丁右ニ帷夏冬ノ事雑要抄ニ帷冬ハ面練
平絹纐纈文裏同白古者張已上堂之夏生平絹ニ以テ
白泥画ニ野筋秋草等ヲ冬同前堂之ニ接以テ纐纈畫朽木
形文ヲ也其躰見雑要抄ニ云々
○伊勢貞丈麻久奈岐隨筆廿ニ丁右ニ朽木形ノ几帳古
書ニ見タリ其文様左面ノ如シ

如此ノ也

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

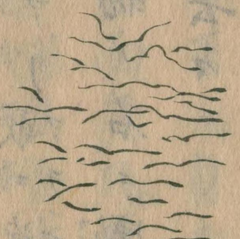
東寺ニテ灌頂ノ時ニ當時用ル帳是也地白文濃
藕糸今云トビイロ也一ニ云地黄ニスハウトモ云又春日
縁起二十巻アリ滋野井家秘抄筆者不知二モ見エタリ
聞書ノ内如此アリト橘嘉樹ガ説也古ノ朽木形
然ルヤ否ヤ貞丈云禁秘抄清涼殿之篇帳ノ下ノ御
注ニ四面有几帳唯夏生(ハスノ)ニ以胡粉畫華鳥ヲ冬ハ朽木形
印本ニ華鳥ヲ葦雀ニ作ルトアリ誤也今古本ニ從テ改之
ハ朽木形ト相對スレバ枯木ヲ云ガ如シ葉ノ朽
テ落タル木ヲ朽木ト云フニヤ身木(ミキ)ノ死(カレ)タルヲ
云ニアラズ古今集雜部ケンゲイ法師

形コソ深山カクレノ朽木ナレ心ハ花ニナサ
バナリナン是死木ヲ云ニアラ
ス物モ當時ハ公家衆ノ詫トイヘバソレニ足マ
ル事アリ歌ニ草木ノ枯ルトテ(ママ)アラズ朽木ト云モ其ノ准ナラント云疑
アリ凡物ノ名ニ感(ママ)テ實ニ違フコモアルモノ也可
熟考云々

○大塚嘉樹(カ)蒼捂隨筆二巻ヨ朽木形文事云々滋野
井権帥公麗卿ノ仰ニ東寺ニテ長者灌頂ノ度ニ
懸ラルヽ所ノ帳ノ文朽木形ノ文ニテ古ノ物ナ
リ地ハ白綾(ナル欤平絹ナル由)ニ見ウケテ玉ハザル文ハ濃色ニテ其

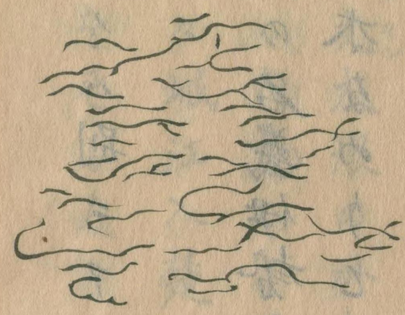
国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4
ガラス使用

形狀大凡左ノ如ナル由又御春日御緣起畫卷物二十卷アリ其中ニモ杓木形ノ帳アリ其文ノ圖モ亦共ニ同キ物ナルヨシ



○權帥殿ノ仰趣ヲ圖ス

千時明和八年辛卯四月十四日於都督御亭五松樓禁秘抄ノ御會アリ其度奉ル千書ヲ之云々天明六丙午年三月ヨリ至五月江府牛込護國(ホンノ)ニテ本尊觀音開帳アリ此節當寺什物數多令拜見其中ニ白キ平絹ノ幔二條アリ其文濃(コキ)色ト見エ今見ル處ハ黒キ也形狀左ノ如シ五月十一日由村氏靈室場ノ莚薦ニ便リテ矢立ノ墨ヲ以テ模寫シテ退ク嘉樹又其圖ヲ欲シテ同生ニ請テ爰ニ臨寫ス然シテ赫蹄本圖ヲ臨寫爲シガタシ仍テ小ニ切約ス



国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4

ガラス使用

實ニ臨寫スルモノハ別ニアリテ聚頭假字画ヘ
収ム云々」

○與清曰くち木形の名義伊勢貞丈が死木(カレキ)あ
らで落葉しさる木なめりと
さもとおもはるれどなほいのぞやまは朽木
の枝の形なれば然(シカ)いへりと見ゆ栄花若枝(わかえ)な此
春ふかうもれ木となきおやとあるを思ふべし
冬春の間を几帳の帷(カタビラ)の文様朽木なれば朽木形
の几帳といへりされども朽木形のみな限(キリ)
はあらず夏秋の間を生(ムシ)る胡粉(ゴフン)ぬて華鳥を
き多る帷(カタビラ)を用ふ几帳の圖類聚雑要抄四巻几帳制
度考など考て知べし

第十七　海部(カイブ)の文(モン)

○源氏物語湖月抄本四十四丁右玉鬘なあさ花田のかいぶ
のおり物おりざまなまめきたれど匂ひやかな
らぬはいとこきかいねりぐして女の御方(カタ)と云云
々河海抄は海浦(カイブノモン)文大浪のかしらをおせるこ云々
○花鳥餘情は海賊(カイゾク)は大なみなみる貝(カヒ)や貝などお
りたる文なり云々岷江入楚はこのいぶは海浦(カイブ)
まゝ大浪のこゝをせるなり秘大海なみる貝く

夜の御方ハ花散里ニ花、海賦ハ大浪ヨみるやみなそこの貝をおりゝるこ

○紫式部日記（傍注本上巻一丁右）

まん裳ハかいぶをおりてとれり腰ニうつ物から草をぬひゝり云々又十九日白のねの御衣でこういぶをうちいでゝ蓬萊大海のほり目よかゝるなど例の事なれどいまゝでのしうとまかなひのしさを云々

按ニ、この文栄花物語、初花四十二丁右ニよも出ゝり初花の巻ハにべて紫日記を取て書ゝるこ

○續世継（二巻廿六丁右）白河、花、宴ヨ裳はえび染を地（デ）なてかいぶをむにびて月のやどりたるやうヨ鏡をゝまにのりて花のしべみとなるれハとせゝれゝり云々

按古本ヨハかいぶをかへしヨ作りゝれど据用ゐゝし

○禁秘抄（上巻八丁右）清涼殿、置物、御厨子乃条下ヨ笛、笙、或貝、類ノ蒔（マヽ）トイヘリ云々注ヨ海部（カイブ）云々海部藻、頭ヲ蒔ゑヨゝ海辺之体

○新猿樂記（群書類従百卅六巻廿二丁左）六郎冠者、繪師、長の段ヨ

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

○山水野水屋形木額海部立石屏風障子軟障扇繪
等上手也云々
○藻塩草十七巻部九十七段淺花田のかいぶの文も
○なぶる大波を織さる源氏云々
空穂物語樓の上上巻五十九丁左まほぎ〳〵のはく
ちばかうのさまいろのおほうみの裳な
り云々
按おりのおほうみの裳とは海浦のかゝをおり
たる裳ニ
○紫式部日記傍注本上巻廿二丁左綾や
さ〳〵として紐どもは固文をぞおほくはへ、
る云々
按おほうみのおり裳ハ空穂物語のおりのお
ほうみの裳とおなじおゝのあを色もしは
おほうなどミな五へまて襲をかさねいろ〳〵なあやな
○りおほうみの裳の水のいろなやのまあ
さ〳〵として紐どもは固文をぞおほくはへ、
る云々
按おほうみのおり裳ハ空穂物語のおりのお
ほうみの裳とおなじおゝのあを色もしは
の巻四十三丁左まいさゝかミちあぎやのまなど
ほうみのおりもみづのいろあぎやのまなど
○してお見ゆいとをのしう見ゆと有

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

○與清曰かいぶの文は海浦の字音まて海賦とも
海部とも書ハ借字なり大波の打よせくるさま
まもあを藻まも具まもあをしほの浦辺の形をい
へるなり又大海のさまを畫くるも有べしさ
ば大海の裳などもいへりと心得べし海部太刀
も鞘も海部を蒔くるこ

第十八分一銭一文目

○青木敦書が經濟纂要後集四巻文人奇士多用古字官府文移通用今字市井下流則用省訛俗書如銭作分聖作圣盡作尽是也續文献通考鈔云々

○新井白蛾が牛馬問三巻四丁左よ分は泉の古字いまゝへの銭の字こ故よ今よ至て金銀両目の事よ通用ハ初學此義を忘らば俗字偽字といふ事誤なり云々

○大塚嘉樹が蒼梧隨筆一巻よ或云俗中金銀の分量をいふハ何分と稱るよ至て分の字を以てハるものハ其字の義如何哉假令一分といふ時ハ其秤の重ハ銭一文の重ヒ爰を以て一銭を以て一分といふより一文目と云事を合書して一文といふを一分と稱るよ似くり請ふそのより

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4
ガラス使用

所ありやと答其考の如く一夕ハ其目の分量如何ほも一文目なりされどもは件の文字ゟ夕と書事ハ文目の二字を合画卅書して夕と稱にるゟ似あらずたまゝ夕乃字体文目を合画せるゟ似されども篇海類篇を考るゟ卷の廿冊中夕字ありて注して曰夕ハ音銭與銭義同俗用ことありされバ一文目は一銭目なる故ゟ此字義ありと見えたり今俗俗草書して一夕と書き又二夕なゝど書てハ全く一銭目の事ゟて夕を草書しゝるこゝ夕夕ゟ共ゟ草書の異体と見えたり然して事

○の序ゟ新舊銭を秤目ゟて試るゟ寛永銭初鑄といへる銭と文の字ある銭と又大佛の像を廢して鑄たる銭等は其掛目各一夕あり近世鑄る所の銭ハ夕目の量にす又事序ゟ関元通宝永樂銭等を懸合にるゟ大抵各一夕ほどなり大凡九分ほどこ是ハ年序を經たるゟ故磨滅せるゟのと見えたり其餘の古銭ハ其徑りの廣き狭き又厚薄ゟさまゝあり況ヤ又度量の多寡ゟあせバ尤不合勿論の事なるべし殊更漢の代の五銖半兩等ハ素より銘文まてゟこのり又其世の度量ゟ考ある

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4
ガラス使用

べし今是を省く漢家通用の宝貨の記等なでも
爭へ知べし今爰に答る所ハ矛の字の證まして
眼前通用ひる所の銭を以て申べしの心但異邦の
銭まてゝ眼前の品〻りとゝいへとゝ清朝康熙の
銭へ其大小又金銀銅等の甲乙ありて一概に比
量しがたし故に閲元永樂等を以て眼前の理を
申答るものゝ云々

○篇海類編廿巻廿五丁右十部第五十三に矛音錢與銭
義同俗用

○示兒編廿一巻に中州金石記巻四淮源廟鉄鐘識に

○曰慶歷三年二月立正書在桐柏云々捨尓人名云
々曰畢阮銭字作[illegible]尓已見于此或云泉字草書云々

○本草綱目一之上巻五十五丁右序例上時珍曰蠶初吐絲
曰忽十忽曰絲十絲曰氂四氂曰蔡音墨十氂曰分四
蔡曰字二分半也十蔡曰銖四分也四銖曰銭十分
也六銖曰一分去声二銭半也四分曰兩二十四銖也
八兩曰鎰二鎰曰斤二十四兩曰鎰一斤半也淮官
秤十二兩三十斤曰鈞四鈞曰石一百二十斤也方
中有小曰少許者些子也今古異制古之一兩今用一
銭可也

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

○輿清曰不は銭の俗字とし泉の草体とし兩説あり銭泉相通へばいづれ銭の字と心得てあらべし
おもを文目と訓ハ銭一文の目方ほよそ七匁の洪武永樂銭など皆目方十分あり一文の銭の重さ十分なれバ十分を一銭といふ所謂一文目
之処をモンメと訓ハ實ハモンと而已訓べきにて目はいひそへたる詞之目は秤の數目まで秤なり付たる目の事と知べし

○倭名類聚抄十一巻　第十九帛衣（ハクノキヌ）白無垢（シロムク）
絹布類部ニ帛、説文云、帛蒲角反、繒也、久岐奴乃（クキヌノ）薄繒（ウスキヌ）也

○喪葬令義解本九巻五丁左ニ凡天皇為本服二等以上親喪服錫紵為三等以下及諸臣之喪除帛衣通用雑色云々義解ニ謂白練衣也云々集解ニ釋云帛衣白練衣也除帛衣故者我朝以白色無貴也天皇服也各以所好色為貴故書云有容有容亦白其馬皎以白為貴故云然也古記云問除帛衣其意如何答當朝以帛色為貴故書云上品餝用之各以己所好色為貴故書云有容有容亦白其馬皎礼以白為貴故然也穴云帛衣舊古代属意稱白衣一巻私記云也

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

但今可求帛字説

○延喜式伊勢大神宮式廿七丁左大神宮裝束条に帛被三條二條長一丈廣四幅納綿各二云々帛衣四領十也一條長九尺廣四幅長三尺上各納綿一斤五寸裏同帛裳四腰長五尺著云々帛意須比八條長二丈五尺廣二幅云々帛巾四條長一尺五分云々盛轆轤筥以錦黏表以緋帛黏裏云々加美阿氏帛八條長三尺廣三寸右絹被一條帛被一條各長七尺廣三尺六寸云々又廿二丁右度會宮裝束条に小綾帛衣一腰高二尺齊長四尺云々又伊弊諾宮二座裝束廿九丁左条に帛被二條云々帛綿袴二腰長各一丈六寸云々帛裳一腰高一尺六寸齊長四尺云々又廿二丁右度會宮裝束条に小綾帛衣一領云々帛襪四條各長二尺云々

按太神宮式中帛の所見おほのれど今は異なる名目の物を擧て同物をはおとづくハ引出ば

○同書縫殿式二丁右六月神今食御服条に帛單衣二領別三丈七尺云々帛帷二條別三丈七尺云々帛袜二兩三尺五寸云々脚帛二條別四丈六尺云々又三丁右新嘗會御服条に帛帷二條帛坂枕一枚一折四尺云々脚帛二條云々又四丁右鎮魂齊服

る榛摺帛袍十三領別一丈二尺一足一云々緑袍四領縁表帛裏帛別三丈云々緑裲襠四腰緑表帛裏帛別三丈丈五尺云々又六丁左正月齊會眾僧法服并講師讀師七條袈裟二條講師深支子綾表帛裏別三丈領講師深支子綾表帛裏別三丈白像綾表浅緑帛裏別三丈表帛裏別三丈四尺云々裳腰料縹帛八尺別四袴二腰黄櫨表帛裏別一丈五尺云々赤練帛袜各二両帛別三尺五寸布別三尺云々右法服依前件若應縫九條着用帛一足一丈二尺二寸袈裟三丈九尺大甲料三丈二尺六寸袈裟二丈二尺四寸袈裟二丈四寸甲料二丈四寸絲五両五條用帛四丈絲四両其縫備所充云々

又十五丁右裁縫功程并二日一日縹帛一足一日減半縹長功日十四人中功日十七人短功日廿人榛摺帛一足長功日大半中功日一人小半短功日二人云々又十九丁右雜染用度并退紅帛一足紅花小八両酢一合臺半圍薪卅斤云々縹帛一足藍半圍黄蘗大二斤云々青緑帛一足藍四圍黄蘗二斤新四十斤云々次縹帛一疋藍四圍薪六十斤云々浅藍色帛一足藍半圍黄蘗八両云々又廿四年料雜物并縹帛八尺盛褌料四脚肥紐四條料別二尺云々黄覆一條長八尺三幅料黄絁二丈四尺裏料帛長同表云々

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

○同書左右衛門式三丁左　小儀条ゝ執禦一人著ニ末額緋行縢纐袍帛博帯騎馬云々

○同書兵庫式二丁五　大儀条ゝ大儀撃鉦鼓人著ニ平巾冠漆羅開頂緋大袖袍縁襖子帛褌裏二其二端各著大口帛袷袴白布襪烏烏云々又三丁細帯ノ長ノ各五尺右大射条ゝ凡大射建ニ羅幡者烏羅十二旒別ニ張竹二株ニ著鈴二口帛巾二條ノ六旒ノ纐六旒ノ緋各長八尺廣八寸云々

○按帛被帛衣帛裳帛意須比帛巾帛袜緋帛加美阿古帛袴帛襪帛單衣帛帷牀帛帛袍帛坂枕榛摺帛袍裏纐帛深滅紫帛淺緑帛赤練帛

袜帛一疋二目纐帛一目纐帛退紅帛青緑帛次纐帛淺藍色帛帛博帯大口帛袷袴などの名目延喜式ゝ見えて喪葬令義解ゝ帛衣白練衣といへる白練の一種の絹あるしなりそれを緋ゝも榛摺ゝも纐ゝも深紫ゝ淺緑ゝ赤練ゝ退紅ゝ纐ゝ青緑ゝ次纐ゝ淺藍ゝ滅紫ゝもさまざまの染成して用る之必白色ゝ限せる物とおぼふべのらずされど大祀大礼の服ゝ白を貴て用らるゝゆへ白練衣ゝて染色の物

ならば夏は生(ス)ませられるもやいくぐりて
の定なやあらん

○日本記略嵯峨天皇弘仁十一年記ス二月甲戌詔
曰云々其服大小諸神事及ヒ季冬奉幣(ス)諸陵ニ則用ニ帛
衣元正受(ケ)朝(ス)則用ニ衮冕十二章(ノ)朔日受(ケ)朝(ス)日聽(キ)政(ヲ)受(ケ)
蕃國使奉幣及ヒ大小諸會(ニ)則用ニ黃櫨染衣(ヲ)皇后(ハ)以(テ)
衣爲(レ)助祭之服(ト)以(テ)搗衣(ヲ)爲(シ)元正受(ケ)朝(ノ)之服(ト)以(テ)鈿釵礼
服(ヲ)爲(シ)大小諸會之服(ト)皇太子(ハ)從(ヒ)祀(ニ)及ヒ元正朝賀可(シ)服(ス)
衮冕九章(ヲ)朝望入朝元正受(ケ)群臣若宮臣賀(ヲ)及ヒ大小
諸會可(シ)服(ス)黃丹衣(ヲ)並(ニ)常所(ノ)服(ス)者不(レ)抱(ラ)此例(ニ)云々

按其服大小諸神事云々の服字一本ニは朕字
に作りたいの文なりて帛は天子皇后の神事
に著御の服なる事知べし

○西宮記臨時所々座体類条ニは新嘗會天皇服(ス)帛御
衣(ヲ)云々同臨時人々裝束大嘗會卯日条ニは天皇服(ス)帛
御衣著(レ)木綿幘(ヲ)并幘就(テ)給(フ)大嘗宮(ニ)之間御裝束也云
々異本ニは天皇行幸之間帛衣齋服衣著(レ)幘就(テ)大嘗宮(ニ)之時
御裝束也ニ作りり

○江家次第二巻(廿)左丁叙位入眼篇ニは裝束位記(ヲ)式云
々五位以上白紙(キ)白標帛帶厚朴(キ)軸云々

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4
ガラス使用

按五位以上とは四位までをいふこ四位五位の位記は白紙ゟ書き白き標紙ゟ帛(ハウ)をもして帯(オビ)ゟもし厚朴(ホヽノキ)を軸(ヂク)ゟいるよしこ

○枕草子 春曙抄十丁右 身をのへしさらん人などはうくやと見やるゝもの、条ゟこゝの女房ゟてさふらふ人の御免のとゟなりこゝろからきぬもきざ〻裳をぎ〻用意なくもてぎぬゟして御まへゟそひふして御帳のうちをゟ而ゟして女房どもをよびつのひ云々

按春曙抄ゟ白衣なるべし云々旁注本九巻廿九丁右ゟもてぎぬゟ作りて旁注ゟうちのけの躰こ云々活字本ゟもてきぬゟきぬゟ作りもてぎぬゟ作りぬと有ゟは疑(ウタガ)ハしきぬゟ作りぬと有ゟは疑(ウタガ)ハし

○禁秘抄中巻一丁左 御装束事条ゟ奉幣發遣時帛(ハク)御装束也御冠御帯無文(モンナシ)也或冠被(ヲヽ)通用只時又自他所行幸之時赤大口(オホクチ)不改他皆帛(ハク)御装束タル一説也云々

按自他所行幸之時とハ江家次第十二巻十五丁左 齋王群行の条を考合ゐるゟ内裏ゟらぬ里内よりの行幸をいへるこ赤大口不改他皆帛御

裝束一説也といへ一説なし他所より行幸の時は
赤大口を改免ばしてその外は悉く帛の御裝
束を用ゐらるゝ

○建武年中行事略解本四巻十一丁右 六月十一日御神事
一日よりはじまる行幸有成のもじめる出御を
くの御裝束を奉る内藏寮てうじ夏はいとゞし冬
○はねる云々又十二丁右神嘉殿のひさしよりいらせ
ぬふ大床子の御座なほのせぬふおようぢんを
りて白木の大床子ゝつ御座白べりなり四の角
るゑら木のとうろをたら木の机なおく關白の

座をまうく所こも絹のとばりかけゝり劍璽大
床子の前なおくとのもくんそう御ゆまぬらに御
舟なとるなりめにほどまためたりその、ち樋
のくちより七ゝびまぬらに山蔭中納言の子孫
なるくらうど御門の事をはのうまつるなりそ
の人なけれバ外戚なる又えあり頭なし
い五位藏人の中ゟも山のげの末御湯殿なま
ねるうへのきぬ脱てうへなる明衣をきゝり下の
さはおなじく着せば神殿の方なむ向ひて七ゝび
ゟをそゝぐさて御舟なる御ゆのゝびらめして

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

いらせぬふ三ひさご免してあまの羽衣（御ゆのゝびら）
なりいふ舟の中よぬぎ捨て更よ又内蔵寮（クラレウ）の御も
のゝぐらを免してあぐらせぬふ其後帛の御装
束をめに内蔵寮の奉そるをぬがせぬひはそば
まゝぬひどのそうの奉そるをうるはしきさい
ふくよ奉るこそ（冬なれ）内蔵寮の奉そる御
情（サツ）を御かうぶりの巾子（コジ）のねよむにぶ片（カタ）ぎこ
御纓（エイ）の下より前よ引まはこ御かうぶり無文
御帯むもんのばんそううちし御用意あるな
り云々

○名目抄衣服篇よ帛衣ハクノキヌ天子神叓之時
用之云々

○飾抄（擇書類従本上巻二丁右）袍部帛条よ天子令従神事御（オホンマヲヌノ）之
時著御天養元九八齋宮群行宸儀召改白御装束
白御装束著御事御大内之時一度召御装束行幸
里第之時先令著御尋常御装束於小安殿召改白
御装束仁安二十一廿一自廻立殿移御神殿主上
著帛御装束無文王巡方御帯（其体甚少自院被献之）

○齋宮は妍子内親王よ白御装束は帛の字を
省て書よるこ

○胡曾抄、天皇、袍、条ヲ帛御服神事、時著ス之ヲ夏、生冬練張云々平絹、白下襲白單白袍平絹、表袴紅、中倍紅、大口御挿鞋張絹白無文巡方帯云々

○法曹至要抄、下巻十三丁左喪服条、天皇御服事ヲ喪葬令云、天皇爲本服二等以上親、喪服錫紵爲三等以下及諸臣之喪、除帛衣外通用雑色、義解云、凡人君即位服絶傍暮、唯有心喪故云本服錫紵者細布、即用浅墨染也帛衣謂白練衣也案之天皇爲二等已上、親喪服錫紵爲三等以下及諸臣之喪、除帛衣外用雑色之法其見于此令矣、十三丁左太上天皇御服事ヲ喪葬令云、天皇爲本服二等已上親喪服錫紵爲三等以下、諸臣喪、除帛衣外見通用雑色、説者云、太上天皇者同正帝也云々壺井義知ノ法曹至要抄、下巻十三丁左書入ヲ帛衣ハ天皇正服ニ定ル令條ノ之時未有黄櫨染也嵯峨天皇、御宇黄櫨、御袍始ル之後以帛衣爲神之服御者云々

○故實拾要、十四巻ヲ天子御神事、御装束帛ノ御服ト云御冠、御袍、冬裏表白平絹夏無裏、御下襲冬裏表白平絹夏無裏、袙冬裏表白平絹夏無裏、御大口裏表白平絹夏冬通用、御袴裏表白平絹夏冬通用、但御袍ハ此裾也御御石帯有文処方御笏、御檜扇色々、蘇芳、御襪白平絹、御草鞋

金襴赤地

○右御神事ノ時著御ニ給フ也云々

○裝束拾要抄上巻三丁右 天子御袍条ニ帛天子令ニ従ヒ神事ニ御之時著御ト云々帛ト云ハ白ノ平絹也夏ハ生冬ハ練ナリ云々

○裝束圖式上巻九丁左 天子御袍条ニ帛御袍御神事ノ御袍也夏ハ白キ生冬ハ裏表白練ノ平絹也圖ニ及バザル故畧之云々

○江次第考二巻ニ帛帯今按ニ白絹也云々同一巻ニ布障子宗直云ニ此ハ唐紙ノ如ク両面ヨリ布ヲモテ張メル障子也今帛障子ト云モ絹ヲ以テハリタル故也云々

○寶石類書八十七巻衣服部ニ帛御服宗直按ニ廻立殿近帛御服縫腋也自リ廻立殿御衣服ニ也云々

○源氏男女裝束抄上巻十六丁左ニ帛御衣著御の時ハ無文の御冠ニ御髻ヲ用ひ無文の御帯を著御しぬふこ御髻は御冠の中子のぬきなむぶこ御えいの下よりまへに引廻しぬふよし云云

○服色管見別録六巻帛御礼服ハ令ヲ見るニ帛衣を天皇ノ御衣とハそのまま即異国の大裘ニ

同じ
○
き練衣なるを今の義解は皀衣也と
絹の上とにるハ彼周の世は大裘を衮冕十二章
の上とにるが如し是ハ質を示にはしまてひと
の國ゝ吾みかどもおなじ心くけりさて周はハ
天地を祭る時は大裘を用ひ其外の祭と大礼は
ハ衮冕よりして下を服しぬひ後漢より天子の
御衣は大裘ゆゑ驚冕より下はるくて衮冕十二
○
章服ゝて通ハし用らるゆゑ吾朝のいまゝへハ
其、大冕などハなくて皀衣をせゝ通ハし奉らし
めぬへり是をゝぶへばかの大裘を衮冕より下
は通ハし用らるゆゑごとし後漢衮冕十二章服
のミを通ハし用られゝるふたゝび相似より柳
十二章服ハ飾をゝて皇の貴きを示にはなれど是
を用ふる世はハ常の著御の服玩ゆゑ飾をゝて
に皀衣を大祭大礼などはかならず通ハして奉せる世は
ハ常の著御ゝ又皀衣ゝその中礼中儀より下の
皀の御著のさゞめはやゞて朝服のさま成べし
大祭大祀などの皀の御衣ハいゝので是は同じう
らんとのるゆ後の世の人今見るさまをゝてい

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4
ガラス使用

まして大祭大礼を奉りし帛の御衣も朝服のさまざまなるをおもへるハいと誤り考るふ今の後大祭大祀などふ奉りし帛の御衣は冕服のおとくなるべきなり帛の御衣ハ布の御衣にて有しまでハ朝服の定めなる帛の奉りて後礼服の製なる帛の御衣絶てふ奉りし後の世ハその御衣なれバ御湯のへまで朝服のさまなる帛の御衣をまつきて朝服と別ちなきまなの御衣を帛の御衣へ布の奉り衣奉る事ハ御湯の後けさうしぞく又同抄ハ御礼服を記せし中ハ女帝白御衣とあるハ天平四年ふり衮冕十二章服をぬへど女帝の御礼服の衣とぬへるハ天平四年ふり衮冕十二章服をぬふら分ての御衣といへる中ふ御礼服の有し証なり帛その古のかくハ戴しなれバ冕服を着六位より下ハ朝服をきる勿り然るふ皇太子まで親王王臣の五位已上ハ礼服(スヘラキ)のさまなるを着御あらんやいまーへ大祭大礼などふ奉りし帛の御衣ハ衣服よりおとれるさまならさる事ハ明の二然るふ弘仁十一年の詔の末文皇太子ハ祀ふ忘さゞるひまさむつきの朝賀ふ衮冕九章を著ぬふべしと見えさり略日本記弘仁十一年二月甲戌朝詔曰云々其服大小諸神事及ふ季冬奉ニ幣諸陵一則用ニ帛衣一正受ニ朝則用ニ衮冕十二

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

章ヲ朝日受ケ朝日聽政受蕃国使奉幣及大小諸會ハ則
用黄櫨染衣皇后以袍爲助祭之服以褙衣爲元
正受朝之服以細叙礼服爲大小諸會服ト皇太子従
祀及元正朝賀可服衮冕九章ヲ朝望入朝元正受ケ群
臣若宮臣賀及大小諸會ハ可服黄丹衣ヲ並ニ常所ノ服ヲ不
拘此例トあり皇太子従祀トハ中祀以下ヲいふ也
どの褙衣ハ大祀の事なりまた
后の御冠よりして服飾皆親王王臣の祀服は同じ
様ならんまハ皇太子いうばかりで衮冕九章を服せさ
せぬふべきやをのれば天皇の彼帛の御衣は必ズ
冕服の定めまて有けるこさて後の世の朝服の
製なる帛の御衣ハ古の中祀中儀をはじめて常
に奉らざるハ様の殘きらひのなるホ下ノ御具

まで皆白くして文なし唯左ろのらぬハ皂の御
頭巾御帯の革と御履の色さぬらるれふるはミこ
是をもしておもへば帛の御礼服ル御衰よりして
下の御具白くて文なるべし御帯ハ皇太子の
如く紳を用ひさせぬひ牙の筋白玉雙珮白き御
褌ノ褌の事ハ今已前白皮ノ爲ヲ著ル事
服玩の辨ま有ハ本朝の十二章服
ハ御衰皆赤地御爲ま赤皮ノ爲ヲ著ル事
服の白きを赤きまのへしこれハ帛の御礼
まてで有べきさて御冠ハかの質を示ーぬふよ
しなれバ大喪ま以ひて無旒の冕まやと
覺ゆれど大衰ハ天地をまつらるハ時のミまて

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

大祀ハ衮冕十二章服ナレバサテモ有ナン大祀大礼ノ祢テ奉ルナレバ飾モきはハあらじ飾あらば又皇太子の御冠ナルモなきまるべき事ニ流の冕な事知べし古事談ニ大嘗會之時代々令著給王きふはハ皇太子の御冠といふハ九旒の冕をいへり天皇の御冠九旒の冕ハまさる時ハ十二旒の冕ナて御礼服となハ帛の御礼服なる也冕の事ハ今已前服玩の辨ニ章服用ひしめぬひし御礼服と云大嘗祭ニ十二章服を用ひしめぬひし御事なけさて冕服の定免なる帛の御礼服の絶ニるハ天平四年ヨリて大礼ニ冕服をもて帛の御礼服ニ用ラるゝ唯践祚の大嘗ニ奉らしめぬひしを其後天長ニ践祚の大嘗祭の飾(カザリ)をハとゞく省(ハブ)カれ五位ヨり上の礼服著(ツケ)ル事をもとゞめらるゝ(ヘラレ)ハ皇(スメラギ)の冕服の定免なる帛の御礼服ニ此御時ヨり全くとゞめぬひしこけり 或人問弘仁十一年の詔ニ帛の御衣を著御のよしのせらるゝをどもニ其定免の二品ある事をいはゞさらバ又おなしさまの放答帛の御衣といふハ親王ヨり諸王諸臣ハいさゝりて一位の深紫の衣諸王の二位ヨり五位まで諸臣の二位

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4
ガラス使用

三位の淺紫の衣といふのおとく彼深紫の衣淺紫の衣など名は同じくてそのさまハ礼服有朝服有用らるゝ式まよりておもひはかるべき之帛の御衣とまた名ハおなじく玄て冕服のさまあり朝服のさまありその式まよりて別ちある事おもひはかるべきなりその上もろ〳〵の神事ふ帛の御衣を用ひさせねふハやがていまゝへのまゝこゝろのれバ更まよりその著御の式ハ記ばまゝきまやいのでで是疑ハんや又問天平四年天皇はじめて冕服して朝を受ぬふ事史まよ見ゆ

續日本紀天平四年春正月己巳朝御大極殿受朝天皇始テ服ス冕服ヲ在京職献ス白雉ヲ是より前ま大祭大礼などま著御のふ帛の御衣冕服の製なるバ此時始て冕服を服させぬふと載べのらびと答ふのらば帛の御礼服は唯衮冕をかうふらせぬふにまて御衣御裳無文なれバ全く冕服をとハさしいふべのらバ天平四年よいまりてハ衮冕十二章服をうつされしるべしかく見る冕服を服ぬふとい記されしなるべし天皇の時ハ何の疑ひのあらん皇后の御衣ハ天皇の御衣ま准ふべしとのれむと大祀大礼などま奉る

帛の御衣も則おもひはかるべし唐の制を考るに皇后の御衣の内より褌衣より上たるハなけれバ吾朝の皇后の帛の御礼服の御衣御褌御帯御裙皆白きを奉るよしまて女の礼服も同じかるべし（御帯ハ則天皇の皇太子の妃の御帯に同じき事令の私考に見ゆ）しかる御首飾しあやおて寶髻なるへし尤其式、異ならんかし凡宝髻ハ内親王一品以下ハそのまさをりさまをりの服ハ一品なまさる事あきらかなりて皇后ハ皇太子此帛の御礼服も聖武天皇の御字より大礼なハ用ひられしなりて聖武天皇の御字より皇后の帛の御礼服を大礼なハ用ひられしといふ事古書ニ打出書たるハ見ねど天平四年の朝賀なり天皇冕服を着御有し事ハ續日本紀にあり天皇の冕服を着御といふ時ハ皇后の褌衣を着御あらんことしられんしなその文を略さるれバ天長の大嘗祭より大祀ニ用ひらるゝ事もとバまりつゐバたえけるなそ云々

○與清曰帛ハ蠶の所吐糸もて織る薄繒之類絹の地太きを繒といひ薄きを帛といひはなはゝ軽く薄きを紗といひ麁悪ニして布ハ似さるを絶といへり喪葬令義解ニ帛衣ハ白練衣なりとあるなど中比よりハ練と生と二種ニ分て冬ハ練衣夏ハ生衣を用られしこ延喜式ニまさまさ

絶

の染色なるも見えず天皇皇后の著御は限りあるゆゑあらねど後の皇(ホヽマ)の大祀大礼はかゝれ(本々)ぬへ(著カ)る服とはなさる也近来の礼服は冬は白無垢(シロムク)夏は白帷(シロカタビラ)を尚び用(メト)るゆゑ帛衣の遺風也白無垢は白色まてむく〳〵とやはらかなるまて無垢(ムク)の字は泥(ナヅミ)て垢(アカ)の無きよしの名ぞ○へるは誤(きヌ)なりとおりへるは誤なり

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4
ガラス使用

835
26
4

国立国会図書館　　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4

ガラス使用

ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4